
キモ男 カンバ～～ック

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キモ男 カンバ～ク

【NZコード】

N8151Z

【作者名】

タゴサク

【あらすじ】

前作のゼロのキモ男さんのカンバツクモノです。

キモ男さん、再び。（前書き）

前作のゼロのキモ男さんのカンバツクモノです。
煮え切らなかつたハーレムルートとか、その他を改めて見ます。
ヤケでルイズも面倒見ますよ。エエ。
ツルペタ、巨乳、口リに年増バツチコイの変態HIS田指します。

キモ男さん、再び。

・・・・・。

オレの名前を知ってるかい？

ヤマダタロウと言つんだぜ。

人生一回田の引き籠もり、誹謗や中傷にや負けたけど・・・。
やつぱりライズに召還だああああ・・・。

タロウです。

皆様、オイラの事を覚えてるか？

一回人生を完全に終わったのに、またタロウしています。テヘッ

さて、現状を説明しますと・・・。

広い草原があります。

私は先程まで自分の部屋に引き籠もつてネットしていました。
手元にはノーパソもあります。

お気に入りのフュギアさんも大切に懐に入れていますよ。
ええ、ゼロ魔20巻のあのテファたんです。

で、目の前にいらっしゃるのが・・・。

ツルペタツンデレ爆発桃髪さんです。

そう、ルイズですよ。

はあ・・。またですか・・。

ネ申様、居るのでしょうか？

また使い魔ですか？

(タロウよ、カンが良いのぉ。)

もう慣れました・・・。

今回は死ぬまで引き籠もり続けるつもりだったのに。
どうして引き籠もりさせてくれなかつたのですか？

（イヤ・・・ヒマになつたから・・・では無いぞ。
設定の都合とだけ言つておくわい。）

ナーラーがらゲフンゲフンと声を出すが、作者さんよ。
アンタ、ゼロ魔は卒業するつて言わなかつた？

おかげでオラは安心して引き籠もりが出でると想つたのに。

しかし・・・どうするべ・・・。

ルイズの性格は記憶していますよ。

ですが、また面倒見るかと思つとね・・・。

気持ちが萎えてしまします。

ネ申様、今回のスペシャルプレゼントはどうすんの？

正直、チートよりも現代化学が使える方がオラは嬉しいのですが。

（タロウよ、この脆弱なハルケギニアで現代化学が通用するか？
ムリだろ・・・。

抛つて今回のスペシャルプレゼントは・・・。）

ゞキヅキヅキヅキ

（前回同様、全系統魔法のチートアーンド魔力無制限としまあす。
コレで頑張れるでしょ？別に嫌いなヤツは相手しなくてもこの世界
では生きて逝けるヨン。
頑張つてね。タロウ。）

おおお。最初から飛ばしてくれますな。ネ申様。

そう言えば転生してからは、何故か前世の現世同様。全くモテないクンでしたが。

もしかして現世に未練が無い様に仕組まれてた・・・のですか？
ネ申様・・・。

(ヒュー・ヒュー、ワシは何も知らないモンね。詳しく述べにでも
聞いてチヨ)

ヤツが教える訳が無いでしょ。

はあ、じゃオラはこの世界で・・・。

ハーレムを田指します。

食える女は全て食つてやるう。

(おお、遂にタロウからハーレム宣言が。
ガンガレよ。そんだけのチートがあればハーレム達成も難しくは無いでしょ。

んじやワシは用が終わつたので消えるヨン

ネットは前作同様神ネットと契約しといたからね。
好きに使ってチヨ

ばいばいき ん)

ネ申様は何時ものバイキンバイバイを言つと靈の如く消えてしもた。
。。

そろそろ桃髪が爆発する頃か・・・。

「チヨツと・・アンタ・・。

いい加減にコツチの話を聞きなさいよ・・。」

「さう言つ貴様は誰だ。余をこの様なド田舎に拉致しあつて。」

オレはさう言つと、ツルッパゲ先生の頭に即効魔法アーティラーンスを唱えた。

瞬間、彼の寂しい頭はボン と言つ音と共にフサフサの髪の毛が。

「お、おおおお。私の髪が。

貴方はメイジですか？いいえ、きっと神様なのでしょう。長年の私の苦悩が貴方の魔法で・・・。」

「フム・・・。何やら貴殿から頭が寂しい寂しいオーラが出てたので、つい余の魔法で
フサフサにしてしもたが。
不味い事でもしたかな？」

「いいえええ。ありがたい事です。

あつ、私はこの魔法学院の火の魔法教師をしています、ジャン・コ
ルベールと申します。

もし宜しければお名前をお伺いしたいのですが・・・。」

「それは構わないが、まずこの状況を説明して貰おうか。
余はタロウ・ヤマダ。

この世界とは違う世界の魔法使いの教師をしておる。」

「誠ですか？でも私では出来なかつた髪の増殖魔法を見た感じでは
信じるしかありませんね。

いえ、世界が信じなくても私は貴方を信じます。

貴方こそが私の求めてた究極のメイジ、魔法使いですよ。
タロウ・ヤマダ様。」

何かコルベールさん、随分とフレンドリーですね。

狙つた訳ではありませんが、の方は敵にしたく無いのですよ。

この世界には当然おマチ姉さん、居ますよね。

彼女こそが自分の人生でも最高の姉さんでした。

彼女と過ごした生涯は本当に幸せでした。

この世界のマチルダも必ず・・・。キリッ

幸せにしますよ。H-H。

さて、ルイズの仕込みでもかかりますか。

アレでも一応はこの世界のメインキャラです。

潰すとなるとアンチになりますから、適当に幸せにしましょう。

でも・・・の外見では・・・。

ピカッと閃いたのは、もしかしたらこの世界はアノ世界の続きでは無いか?

と言う事です。

試しにあの方を呼んで見ましょう。

「アクア姉さん」

(呼んだか?タロウよ。)

やはりこの世界はアノ世界の続きでした。
呼んだら来るもんな。

「久しぶりです。 さん。(真名なので伏字です。)

久しぶりにこの世界に来たのですが、体系がアレなのですよ。
何とかかつての体系に戻して頂けません?」

(造作も無い事よ。タロウ。)

フム・・・。『レで良いか?』

見ると醜かつたお腹もスリム。

記憶の中に残つてゐる一番ベスト時代の私の体系となつてたのです。
やはりアクア様は私の最高の女神様です。

感謝するですよん

(・・・あまり褒めるな。タロウ。
照れるでは無いか・・。)

「おおお、 様がデレた。
今回も世話になります。」

(任せなのだ。タロウよ。

お前が帰つた事は他の精靈にも告げておいつ。

フフフ。

楽しみにしておけ・・。)

水の精靈、アクア様は何やら不気味な事を仰つてましたが・・。
ま、良いでしょ。

おかげでメタボから開放され、身体の軽い事

ん? ? ? ? ? ?

皆様、どうしたのですか?

金魚みたいに口をパクパクさせて・・。

「タ、タ、タ、タ、タ、タロウ様、貴方様は、水の精靈様とお知り
合いでしたか?」

「ン？？ああ、の方は以前からのお友達ですよ。
それがどうかしましたか？」

縦ロール髪のおぜつ様は何やら言いたそうですね。
あれは・・・。

モンモンだ、確かに。

「あ、あのおお。タロウ様で宜しいでしょうか？」

私はモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシーと申します。
長いのでモンモランシーと呼んで頂けると幸いです。
所で・・・。

先程、タロウ・ヤマダ様がお呼びになられた方は、この国で水の精
靈様と呼ばれる存在ですよね？」

「多分、そうだと思うぞ。余は昔からの知り合いだけだな。」

「精靈様とお知り合いですか・・・。

あのおお、精靈様にお願いとか出きるのでしょうか？」

「そりや頼めば出きるが。だが、それがお前に関係あるか？」

「い、いいえ・・・。私の実家は水の精靈様の盟約の一員として、ト
リストインで働いていました。

ですが、私の父があの方に粗相を働いてしまって、盟約の一員から
外されてしまったのです。」

「ふーーん、可愛そうだね」

「ですので、タロウ様があの方に取り成して頂けないか・・・と。」

「だが断る。

余はこの国に拉致されたばかり。

自分の国に帰る術も無くした今の状態で、他人に構う余裕は無し。ああ、忘れてたな。

そこの桃髪。

この責任はどう取る気だ？」

いきなり話を振られたルイズはパニクつてしまつた。

コルベール先生の頭に毛が生えたり、メタボのアレがいきなりスリムになつたり、

水の精霊が出現したりと頭がオーバーヒートしてたのである。

「わ、私は・・・」

「タロウ・ヤマダ様、お待ちください。

私がこの場の責任者です。どうか怒りを納めて頂けませんか？

ルイズに話をさせると、場が崩壊すると判断したコルベールが話しひ割つて入る。

中々良い判断ですね。

コルベールさん。

「フム・・・確かに「お子様」に責任取れと言つてもムリだな。良からひ。」「コルベールさん。貴方と談判しましょう。」

「チョッ、お子様つて誰の事よ。」

「そこに居るのは自分のケツも拭えない子供だろ？」

「乳ナシ娘さん」

「フンガーー、乳なんて関係無いつしょ。」

「まあ素材は悪く無いのに、そんだけ乳が無ければ女として見込みゼロですね」

自分に任せれば乳くらいは成長させられますけど「

オレはそう言つとセクハラマジーックと叫び、モンモンに対し乳促進魔法を発射。

いや、ネ申様。

今回のタロウは一味違いますね。

イメージ通りにモンモンのツルペタが見事な形の乳に成長

「わ、私の胸が・・・。

ありがとうございます。タロウ・ヤマダ様。」

「アラ?もう一人のツルペタに発射するつもりが間違えてしまた。返してくれる?」

「イヤです。長年の悩みが解決したのですわ。
この胸は私だけのモノ。嗚呼、嬉しい」

モンモンは自分の成長した胸を大切に抱きかかえ、悶絶してた。

「チヨッ、洪水のモンモン。その胸は私のモノよ。
私に渡しなさい。」

「絶対にイヤ・・・。コルベール先生、胸がとてもキツイので早退しますね」

「あ、ああ。分りました。モンモランシー嬢・・・。

しかしタロウ様の魔法は凄いですね。

ハルケギニアの魔法とはケタが違います。」

「この世界の魔法を見た事は無いが、この程度なら余の生徒なら誰でも出来たぞ。

（大嘘）。

「素晴らしいですね。私も貴方に師事したいと思つ位です。」

「若くないとムリですよ。それに私の勤めてた学校の生徒は、全員が魔力満点で無いと入学試験すら受けられません。

見た所、この学院の生徒は私の受け持つてた生徒と比較するのもバカバカしてレベルの生徒ばかりです。先生も大変ですね・・・。」

実際にトリステイン魔法学院は幼児に魔法を教えるのと同じレベル。

口クな教育を受けていないガキばかり。だから滅びそうになるのよ。

多分・・・。

その後、召還会場でグダグタしても仕方ないので、変態校長オスマンに交渉に行く事になりました。

コルベールさんは頭がフサフサでニコニコしておられます。

今、この瞬間にメンヌベルに殺されても笑いながら逝けそうですね。ツルペタツンデレ桃髪は、ワテ等について来ながらも、何で私の胸

を・・・。

とブツブツ呟いています。

アーアー、聞こえません。

またオスマンと遭うのか・・・。

今度の人生はもう好きに生きる。
行き当たりバッタリで生きます。

キモ男さん、再び。（後書き）

本作は原作とは殆ど話の筋が変わります。
一応、原作に従い話を進めますが、キャラは別物となります。
原作崩壊となりますので、原作萌えの方は見ない事をお勧めします。

変態校長とキモ男さん（前書き）

オスマンとの対決です。

変態校長とキモ男たち

「ハヤシやのわお。」

「オーランド・オスマン。

ヒマだからと言つて私の尻を撫でるのは止めて貰えませんか?」

「いい天氣じやのわお。」

「ボケたフリしてもダメです。
その手をどけてください。」

「真実はビリにあるのかのわお。」

「少なくとも私のスカートの中にはありません。
机の下にネズミを逃がせるのは止めて下さい。」

「モートソングール。気を許せる友達はお前だけじゃ。
オスマンはネズミにナッシを『え齧らせている。

「やうかやうか。もつと欲しいか。ほれやるぞ。
所で今日の下着はナース色じやつた?」

チコウチコウとネズミが何やら鳴りしる。

「やうか、白か。たまにはショックキングピンクとか黒も良いがの。
今度秘書経費で下着を・・・。」

オスマンは最後まで言えずにロングビルからアップパー・カットを食ら

つてた。

「ナ、ナイスパンチじゃ。ぐふつ・・。」

「オールド・オスマン変態校長、今度やつたら・・。
コレでは済ませませんわ・・。」

ロングビルは両手を組み合わせバキバキと指を鳴らしている。
オスマンは首を力クカクと震わせ、イエス・マムと答えるのみだつ
た・・。

タロウです。

いよいよやつて参りました。

この世界最強の変態。

オールド・オスマンの居る校長室です。ハイ。
でも避けてはいけません。

ヤツを避けるとマチルダ姉さんと知り合つ事が出来なくなります。
今回も土くれのフーケは出しませんよ。エエ。

テファのためにもね。

「オスマン校長、コルベールです。

召還の儀式でトラブルが出ましたので、『相談に上がりました。』

「コルベール君か？

良からう、入りたまえ。」

オスマンの許可が出たので、コルベール、ルイズ、そしてオラが校長室に入る。中にはロングビルさんこと、マチルダさん、オスマンが居た。

「そこの方はどうなたかな？」

「オスマン校長、彼は異国の凄いメイジです。見てください。私のこの頭を・・・」

オスマンは目を見開いて驚いてた。

あまり男の顔は見ないので、気づかなかつたが、ピカピカ頭がフサフサとなつてゐるのだ。

そりや驚くつてモンです。

「ツルベール君がフサフサ君になつとる。

どうしたのだ？その頭は。

悪いモノでも拾つて食べたか？」

「『』に『』しゃるタロウ・ヤマダ様の魔法でこいつなつたのです。

嗚呼、若き日の私の頭が蘇るとは・・・」

オスマンはコルベールの頭を触つたり毛を抜いたりして確かめてた。

「痛いではありませんか。校長。」

「スマンスマン。ホンモノか確かめて見たくての。お。だが毛根もある。まさにホンモノだ。」

「」の方ですが、ルイズ嬢の召還の儀式でこのハルケギニアに呼び寄せられたそうです。

異国の魔法学院で教鞭を取られてたそうですよ。素晴らしいメイジです。」

「フム・。確かにコルベール君の頭が白毛になつてゐる。昨日までは光輝く寂しい頭だつたのだがの。」

おお、挨拶が遅れてたが私がこのトリスティン魔法学院の校長、オールド・オスマンじや。貴殿の名を宣しければ教えて頂けぬか?」

「始めてまし。

二ホンと言う国で教師をしていましたタロウ・ヤマダと言ひます。趣味は魔法と・・色々です。」

「色々と言つのも気がかりだが・。・して、貴殿はどうしたいのじや?」

「まず帰る方法が分るまでの生活保障をお願いします。

使い魔にはさすがになれませんが、代わりにルイズ嬢には使い魔の代わりとなる

異界の動物を進呈致します。」

「へ??.私に使い魔となる動物をくれるの?」

「人間の使い魔よりは勝手が良いでしょ？ルイズ嬢。」

「そりゃそりただけど。でもドコに居るのよ。」

「後で召還したるで待て。小童。

して・・。そこにいらつしやる美しいおぜう様。
貴女様からは何か悲しい波動を感じるのですが。
もしかしてイヤな事を無理強いされていませんか？」

「へ？？私ですか？」

「ハイ。メガネをかけた美しい年頃のおぜう様は貴女だけです。この場では。」

「ま、嬉しい事を。でもどうして私から悲しい波動を感じるのですか？」

「私の世界には「セクハラ」と言つ女性に痴漢行為をする男性が後を絶たないです。
女性をモノ扱いして、勝手な事ばかり無理強いして逮捕される連中も多々。

そう言つ被害に遭われてる女性と同じ悲しみが貴女から感じられるのです。」

「ま、お優しい事を。そつですわね・・・。」

ロングビルは黙つてオスマンの方をジロリと睨みつけている。

「ナルホド・・。恐らく秘書と言つ弱い立場の貴女にヒビジジイが
無理やりセクハラを

していりますね。分りました。

貴女の苦しみをヒビジジイにも味わせてあげましょひ。少しの耳を
拝借して宜しいですか？」

ロングビルはハイと言つとタロウの口元に耳を傾ける。
オスマンは何やら密して雲行きとなり汗ダラダラ・・。

「フフフ。面白い事ですわね。

分りました。タロウ・ヤマダ様、お任せします。」

「ラジヤです。では・・。

オールド・オスマン。立ていい。」

気合を入れた声を上げると、オスマンは自分の意思とは別に直立不
動の姿勢を取られれた。

「な、ナニが始まるのじや。」

「楽しい事ですよ」

オレは即席魔法、ヤクハラチエンジを唱える・・。
すると・・。

オスマンの立つてた位置には十六位の見田麗しい女性が。
そしてロングビルさんの立つてた位置には逞しい男性が。

「ロングビルさん、彼女に女性のイヤな事を散々味わせてください。
オスマン」ちやん、頑張つて耐えてね」

「わ、ワシがおんにやの子に・・。わーい。触り放題だ
い。」

オスマンは喜んでいるが、それからが地獄の始まりだ。

男性にあるべきイチモツも消えているのに自分にセクハラしても痛いだけ。

そしてキモチワルイのだ。

ロングビル氏はオスマン口ぢやんに近づくと・・・。

「オスマン口ぢやん、カワイイわね。ゲヘゲヘゲヘ・・・」
と、鼻息も荒く近づき、触るわ、叩くわ、揉むわとムチャクチャしまくり。

オスマン口も最初は喜んでたが、段々恐怖に変わり・・・。

「もうイヤ 元に戻してえええ。」

「ダ・メ・です。女性のセクハラの苦しみはこの程度ではありますわ。
私、イヤ今はボクの苦しみを思い知れええ。」

ロングビル氏は更にオスマン口に触る触る。
仕舞いには彼女は失禁してしまい悶絶して気絶。

「ふう・・・この程度で良いわね。

タロウ様、ありがとうございます。そろそろ元に戻して頂けます?」

「ラジヤです。」

オレはセクハラチョンジを解いて、オスマンとロングビルさんを元に戻す。

オスマンは下半身ズブ濡れで氣絶してるが、汚いので始末だけはしておいた。

そして活を入れ、オスマンを正気にすると・・・。

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・。」

と正座して土下座を始めた。

余話怖かったのだろう。

世の女性はこんな恐怖を毎日の様に味わってるのだ。

痴漢に憧れる男性諸君。

痴漢で感じる女性なんて皆無に近いんだからね。

お近づきになりたいなら、キチンと口説いてください。

フタれたら諦めるのですよ

さて・・。

オスマンに対するオシオキは終わったので交渉再開です。

「オスマン殿、自分は今、見せたみたいな魔法のほかに色々と楽しい事が出来ます。

ええ、色々とね。」

オスマンは恐怖のため、まだガクブルしてる。

フフフ・・。

いくら長生きしてようが、おんこにやの子になる経験だけは皆無だつたろう。

ザマーですよ。

ロングビルさんも元の女性の形態に戻り、勝ち誇った顔をしております。

「わ、分りました。タロウ・ヤマダ殿。

もう一度とセクハラはしません。

女性の嫌がる事は絶対にしません。

お許しを・・・」

「オスマン殿、女性に対するセクハラの恐怖、良く分つたでしょ。一度としてはいけません。今度したら・・・。幼女にしてスラム街に放置しまっせ。」

「もう懲りました。ワシは男のジジイで結構です。お触りしたい時は、お金を払ってンナ店に行きます。」

「宜しい。じゃ、交渉再開と逝きましょうか」

そつからは「ツチのペースでした。

始めつから相手の度肝を抜いたので、もつ言ひなり。仕事は「」の学院の教師に赴任。

一応、全系統が使えるので、手抜き教師を叩き潰して後釜に座る事にしました。

寝床は自分で建てるので、学院内に空き地を貰います。食事は学院の教師と共に頂く予定です。

ルイズ嬢の使い魔は明日、校長室で召還する事にしました。

ナニを召還したろうかな・・・。

ま、疲れたので今宵は食事をメイドさんに運んで貰い、貴賓室に休ませて貰いました。

チャンチャン

変態校長とキモ男たち（後書き）

オスマン「やんとロングビル氏の絡み、いかがでしたでしょ。
痴漢はいかんですよ。皆様。
どうしても女性に近づきたい非リア充の皆様は金を払つていかがわ
しこお店へ。

マチルダさんとキモ男さん（前編）

マチルダを引き込みます。

マチルダさんとキモ男さん

タロウです。

オスマンとの交渉を終えたオラはロングビルさんの案内で、貴賓室へと向かっています。

「タロウ様、今田はとても楽しい体験をさせて頂きました。本当に感謝しております。」

「ロングビルさん、世の女性の半数はンナヒビジィの手籠めにされてるのですよね。

女性は好きな男性のみに身体と心を預けるべきなのに、立場を利用し、

イヤな事をするヤツは後を絶ちません。もし困った事があれば相談して下さい。

ヤローの相談は、あまり聞きたくありませんが、麗しい女性の相談は最優先でお聞きします。」

「ま、本当にダンディなのですね。タロウ様。

分りました。また何かありましたら是非、『相談させてください。』

その時、オレは周囲に誰も居ないので感知してから彼女にボソリと呴いた。

「マチルダさん、土くれのフーケだけは絶対に止めてください。妹が悲しむ事になりますよ・・・。」

それまで温和だった彼女の態度が瞬間に氷点下に落ちた。

「どいで知ったのかい？」

「私はこの世界は一度目なのです。試しに言いましょうか？ ウエストウッド村の山林の中に孤児と住む彼女の名は・・・」

「分った、信じましょ。でもどうしてソナ事を私に告げるの？」

「テファアを悲しませたくないからですよ。

貴女は絶対に捕まらないと信じてドロをじてるでしょうが、世の中には絶対と

言う事はありません。悪い事してたら必ずお繩になります。そして前世では私の妻だった貴女を不幸にしたくは無いのです。」

「わ、私が妻だったって？アンタと・・・？」

「ハイ。信じられないでしょうが、事実です。

この世界は不思議な事ですが、輪廻の繰り返しを行つてゐみたいです。

その証拠をお見せしましょう。アクア姉さん・・・。」

小さい声で呼んだにも関わらず、アクアさんが参上です。

「呼んだか？我が盟友、タロウよ。」

「以前、私がこの世界に居たのは何年位前ですか？」

「もう数えるのもバカバカしい程、昔の事だ。

人間の年月で言つと一千年は経過してるだろ。」

お前が消えてからは、私は面白いヤツが居ず、ラグトリアン湖で引き籠もつておつた。」

「だ、そうですよ。マチルダさん」

「マチルダは目の前に居る存在が、普通の靈とかモノでは無い事は理解出来てた。

だが、この存在が何なのか…。
理解出来ないで居た。

「あの…。貴方様は…。」

「我はお前達、单なるモノが言つ、水の精靈なり。
我はタロウ・ヤマダとは古べからい盟友なり…。」

マチルダはアゴが落ちそつになつてたが、もう信じるしか無かつた。
目の前の存在はまさに精靈そのものなのだから。

「失礼な事を質問してお許しください。

私はタロウ様の僕となるマチルダ・サウスゴーダと言います。」

「フム…。お前はタロウの僕となるのか?」

「ハイ。私はタロウ様に色々と助けて頂きました。
ご恩を返すには私の些細な人生を預けるしかありません。
どうか私の存在を認めてください。」

「良かう、お前を单なるモノからタロウの僕、マチルダとして認
識しておこう。

くれぐれもタロウを裏切るで無いぞ。」

「モチロンです。水の精靈様。」

「タロウ、このモノに我的秘薬を『貯めておけ。』日々の暮らしの糧の足しにはなるであろう。」

「ありがとうございます。精霊様。」

また遊びに行きますので、お待ちください。」

「また以前の如く、池のある家を早く持て。我もそこに移動したいぞ。」

「もう少しをお待ちくださいね。自宅を持ちましたら必ず池を作りますので。」

「楽しみに待つとしよう。では・・。」

そう言わると水の精霊様はブシュツと消えてしまいました。マチルダの手元には大量の水の秘薬が瓶に入っています・・。

「……こんな大量の秘薬なんて・・。凄いお金になります。」

「良かつたね。マチルダさん。」

それを換金してテファアの仕送りの足しにしてください。」

「数年は大丈夫ですよ。こんだけあれば。ああ、もうひんアレは廃業します。」

「それが良いですよ。あ、部屋は『ココですよね。じゃお休みなさい・・。』

オラは部屋に入ろうとするが、マチルダさん、ガシッとオラの腕を

「タロウ様、私は貴方の僕となつたのですよ。

私のすべては貴方のモノ。何故離れようとするのですか・・・」

ヤバ・・。

ヤンデレ化が始まってる。

前世の時もこの日になつたら、逆らう事が出来なかつたのら。
しかし、着いたその夜に女性を部屋に引き込むのはさすがに・・。
それに腹が減りました。シクシク・・・。

そいから仕方ナシに彼女の言つがママに自分の部屋に入り・・・。
ゲフンゲフン・・・。

お子様には知らせたく無い事になりました。

腹がグーグー鳴つたので、手元のカバンに残つてたポテチを食べて
たら、

彼女に奪われたのは言つまでもありません。

・・・・・・。

そうだ

オラはネ申様から魔法に関してはチートにして貰つたのら。
腹が減つたなら、食べ物を魔法で何とかデキネか?
試して見ます。

「カップメンと箸、ついでにカセツトコソロとボンベ出るーー」

出ましたよ。すべて・・。

マチルダさんもビックラしますが、食べ方が分らないので田を白黒させてるだけです。

オラは腹ペコタヌキなので、ヤカンに水を足し、コンロでお湯を沸かします。

そしてカツブメンにお湯を足し・・。

三分待つと・・。

おおおお。ビバ、カツブメン

マチルダにも食べ方を教え、一緒にズルズルと食べます。

彼女は初体験のカツブメンに感激し、ンナ美味しいの初めて　と大騒ぎです。

腹が膨れたので寝ようとすると・・。

狼さんに食われてしまい明け方まで寝かして貢えませんでした。シクシク。

寝不足でも水魔法で何とか出来てしまつ自分が悲しいっス。

翌日、彼女は肌がツヤツヤしてたのは言つまでもありません。

マチルダさんとキモ男さん（後書き）

ギリギリR15です。

マチルダさんはタロウの僕となりました。

シルベスターはモスクワにいた（前略）

シリエーブシルベスターはモスクワにいた。

シヒスタさんとキモ男さん

タロウです。

マチルダさんは夜明け前に自分の部屋に帰りました。

ええ、さすがに昨日と同じ服では不味い、と、帰つたのです。

私は彼女が部屋を出ると同時に部屋の換気を始めました。

男と女のアレの匂いつてかなり篭るのですよ。

風魔法ですべての空気を外に出し、部屋の空気はスッキリです。
さて・。

着替えが無い事によつやく気がきました。

今、着てるのは何故かスース・。

パジャマ代わりのジャージは所持していますが、下着がありません。

困りました・。

何とかしないといけません。

ぐうううう

・・。

オラの腹の音です。

昨日はカツブメンしか食べてませんからね。

そろそろマチで胃袋様に本格的に補充してやらないとかなり不味い
っス。

昨日はゲフンゲフンな事ばかりで肝心な事を頼んでおくのも忘れて
ました。

どうするべ・・。

悩んだと、部屋のドアをノックする音が・・。

「どうぞ。開いてますよ。」

「失礼致します。「チラはタロウ・ヤマダ様のお部屋ですね?」

「その通りです。どちら様ですか?」

「学院のメイド、シエスタと申します。朝のお食事をお持ちしました。」

「おお、シエスタさんキタ

マチルダさんに続く私の元奥様。

やはりこの世界は輪廻して繰り返していますな。

ですが、何もかも前世と同じに動いては面白くありません。

今回は成り行き任せと決めています。キリッ。

「ありがとうございます。どうぞお入りください。」

シエスタは了承を得ると駆け車に乗せた食事を部屋に運び込む。

・・・・・

ヨイヨイ、ナニ?この膨大な量は・・・。
またメタボに戻す気かよ・・・。

台車の上には朝食にしては膨大な量の食事が乗せられています。

聞くと、これが貴族の方の朝食一人前だそうです。

あのジジイ、よほど怖かったのか、オラの扱いが前世とはケタが違います。

やはり変態は叩くに限りますね。ウン。

「シエスタさん、私一人では片付ける事が出来ません。

もし朝食がまだなら」「一緒にいががです?」

シェスターはアワアワと慌てて、『迷惑で無ければ・・と、了承してくれました。

それからは楽しいランチタイムです。やはり元のシェスターと同じ人格らしく、記憶とすべてリンクします。

しかし見ると手荒れが凄いです。

洗濯機も無い、この世界ですから洗濯は当然、手作業。

荒れるのは当然でしょう。見かねたオラは彼女の了解を得てから、手荒れを魔法で癒していました。

すると、アラ不思議・・。

彼女の荒れてた手の肌は赤ちゃんみたいにスベスベで綺麗になりました。

「『』、こんな事をして頂いて、宜しいのですか?」

「あ?

いいえ。こんな自分には造作も無い事です。

何でしたら手荒れの惨いメイドさんを全員連れて来て頂いても結構ですよ。

女性が荒れた手をしてるのは人類の損失です。

後でハンドクリームを作りますので、仕事の後に塗る習慣を付けてください。」

彼女は感激して、私に出来る仕事はすべてお任せください、と、直立不動の姿勢で

私に敬礼してくれます。

ドコで覚えたの?海軍式の敬礼。

まあハンドクリーム程度なら、今すぐでも作れます。
イメージさえ出来れば大概の事は出きるのですよ。

私は。

ただ、女性の下着とかは想像の埒外です。
お食事の後に人数分のハンドクリームを創造してあげ、彼女に手渡します。

「こ、こんなに・・・私たちの給与ではこんな秘薬の代金は払えません。
どうすれば・・・」

「お金なんか要りませんよ。貴方達は学院のために働いてるのです。
自分も本日からは学院で働く、言わば同僚。
同僚の健康維持も仕事の一環ですよ。」

そう言うと彼女は喜んで受け取ってくれました。

後に聞くと、彼女の同僚も凄い手荒れに悩んでたとか・・・
クリームを塗り始めたら、全員がアカギレから開放されたそうです。
良かつた良かつた

シエスタさんとのファーストコンタクトはこの程度にしておきましょう。

いくら何でも始めからゲフングフンな関係はあり得ません。
いえ、ありましたが例外としておきます・・・。

シエスタさんと別れ、部屋の外をブラブラと散歩する事にします。
忘れてましたが、私の魔法は一応、杖を使っています。
ホントはイメージしてるだけなのですがね。
それでも魔力が枯渇しないのですから、ネ申様。
どんな魔力をプレゼントしてくれたのですか？

学院の閑静な木陰を見ると、タバサさんが本を読んでおられます。相変わらずクーデレしているのですね。

ま、今は関わらない事にします。

ボチボチ学院の生徒もアルウェイーズ食堂で朝食を食べ始めたらしく、生徒で賑わっています。

オラは食べたので、行きませんが・・・。

当座の着替えが無いので、オスマンに談判に行く事にしました。

「オスマン校長、おはようございます。タロウです。」

「タ、タロウ殿か。セクハラはしませんぞ。HH。
もう一度としませんぞ。HH・・。」

「別に問い合わせに来たのではありませんが・・・。
ま、良い傾向です。

所で・・・。」「

端折りましたが、下着と着替えは大至急部屋に届けてくれるそうです。

ついでに支度金として、相当の金子を袋入りでドカンと置いてくれました。

今日の予定は授業の見学、ルイズの使い魔の戻還などです。

授業は手抜きのアホ教師が居たら潰してOKと許可を貰います。万一に備え、オスマンのサイン入り許可証も発行して貰いました。こんな変態でも学院のトップです。

大切に使いましょう。

オスマンと別れ、自分の居室である貴賓室に帰るとシエスタが下着等を持って待っていました。

「タロウ・ヤマダ様、オールド・オスマン校長の指示がありましたので、着替えなどをお持ちしました。」

「ありがとうございます。シエスタさん。では着替えますので、そ

の服を頂けますか？」

「裾合わせがありますので私が調整します。裁縫道具も持参しますわ。」

見ると、裁縫セットもドカンと置いてあります。

「……分りました。では……。」

シエスタを伴い部屋に入り、まずは下着を着替えます。もちろん彼女には向こうを向いて貢っていますよ。まだ彼女は清い乙女なのです。。そして上着を着てズボンを履きます。やはり少し裾が長いですね。

「シエスタさん、着替えました。」

「やはり調整が必要ですね。では裾を合わせますので、任せてください。」

彼女はそつと、オフの足元にしゃがみこみ、裾を合わせてくれてます。

を見ると……。

ゲフングエフン。

彼女の双壁の谷間が見えます。

ええ、偶然見ただけですよ。絶対にガン見はしません。
それに昨日は散々ゲフングエフンな事は済ませています。
ですので冷静ですよ。エエ・。

後に彼女と深い仲となつてから聴くと・・。

狙つてたそうです。自分が谷間を覗く事を。

女性はターゲットを定めると攻撃に入るのが早いですね。
男には真似出来ません。

後に私はそう述懐しております。

裾あわせは十分程度で終わりました。
さすがプロです。ハイ。

ミシンも無いのに、この技術。

・・・・ミシンか・・。

彼女と暮らしてた時、彼女には色々と洋服を縫つて貰いました。
あの時は創造魔法が使えなかつたので、手縫いでお願いしてました
が。

ついホロリと思い出してしまいました。
すると・・・・・。

田の前に足踏み式の旧式ミシンがテンと出現したのです。
想像しただけなのですよ。
自分も驚きました。

「あ、あのおお。タロウ様、コレは何でしょ?/??/?」

「私の世界の古い形式のミシンと言ひ足で踏む事で衣服を縫い合わ
せる事の出来る機械です。」

オラはシエスタに使い道を教えてあげました。

「素晴らしいですね。こんな機械があれば服を縫うのも簡単に出来ます。」

「では貴女に差し上げますよ。自分が所持しても意味はありませんから。」

「こんな高価な品物、頂けません。今朝の秘薬の代金も払えないのに。」

「アレは御近づきのプレゼントですよ。代金は結構と言つたでしょ。そうですね・・・。」

ではいつしまじゅう。このシンシンで色々と服や下着を縫つてください。

もちろん私以外の方の服もOKですよ。それで代金は帳消しとします。

いかがですか?シエスタさん。」

「・・・・分りました。」

ではお預かりしてタロウ・ヤマダ様の服や下着は私に任せてくれださい。

「満足頂ける品物を作りますので。」

「楽しみにしますよ。ああ、そつと運ばれを運ぶのも大変ですね。」

私の魔法でシエスタさんの部屋に転移させますので、私の手を握つて部屋を

思い浮かべてください。

目は瞑つてくださいね。」

彼女は私の指示に従い、手を握つて目を瞑つてくれました。
次の瞬間。

一瞬で彼女の部屋に転移・・・。
同僚のメイドさんがビックラしたのはお約束です。

シエスタちゃんとキモ男さん（後書き）

シエスタとの出会いでした。

まだゲフンゲフンな関係は考えてませんよ。

ええ、彼は鬼畜ではありません。

変態ですが・。

風リタとキモ男（前書き）

風男との対峙の巻きです。

風ヲタとキモ男

着替えた服の洗濯などをシエスタに頼み、オラは授業の見学をするべく職員室に向いました。

丁度オスマンも職員室に来てたので、彼にオラの説明をして貰います。

「職員諸君、今日から我が学院の教師として赴任して頂く事になった異国メイジ。

タロウ・ヤマダ殿です。

彼の魔法の腕はこのオスマンが保障する。

彼には得意の魔法はすべてと言われる所以で、彼に自分の受け持ちは自分で決めて頂く事になった。

諸君の中で手抜き授業をしてる方が居たら最優先で解雇する事に決ました。

そんな職員が居ない事を願うがね・・・。」

職員はオスマンの一言でザワザワと騒ぎ出した。

新規の職員が入るのは良いが、解雇される人間が出る・・・。

今まで生温い仕事をしてた彼等は真っ青となつてた。

「始めて。私は異国の魔法学園で教鞭を取つてましたタロウ・ヤマダと申します。

何分にもこの国の常識に疎いと思ひますので色々とお世話になると思ひます。

「ヨロシク」

何故か彼等からスルーされましたが、歓迎されていないのは当然です。

ま、誰を切るかはオラの一言ですので、楽しみにしていましょ。

最初の授業はルイズのクラスです。

教師は風ジャンキーのミスター・ギター。

この世界でも風最強と騒いでいるのでしょうか。

まずはヤツを切りますか・・。

「では授業を始める。

今日は異国のメイジとか舌つたロウ・ヤマダ殿が居られるので彼に模擬魔法を見せて貰うとしよう。

タロウ・ヤマダ殿、お願ひ出さるか?」

いきなり話を振られたが、ま、予想してましたので落ち着いて返答致します。

「分りました。

皆様、始めまして。

異国の魔法学院で教鞭を取つていましたタロウ・ヤマダと言います。今日はミスター・ギター殿から模範魔法を見せてくれと頼まれましたので、

皆様にお見せしましょう。

ですが・・、口では少し不味いですね。

ギター殿、野外に移動しても宜しいですか?」

「構わぬが・・。では諸君、野外に移動する。

ヴェストリの広場に移動しそう。」

ギターがそう言つと生徒は全員席を立ち広場へと移動を始めた。オレはギターと並んで歩き、彼と少し話をしてた。

「タローダン、ビリーヴ魔法を見せてくれるのですか？」

「そうですね。教室では部屋を破壊してしまつと困りましたので、室外に移動して貰いましたから、私の作るゴーレムを、ギター殿の得意な魔法で破壊するといつのはいかがでしょ？」

「ほほお。それは楽しそうですね。私の風を見せて差し上げます。」

「楽しみにします」

やがて学院の外れにある、ヴェストリの広場に着くと、生徒に安全な場所に固まつて見学して貰い、オレは、ゴーレムを練成した。形は・・。

そう、子供時代に熱中した日本独自のスーパー・ロボット。どこかの国がテコンとか言ひ捏造品を作つたが、世界の子供が支持した・・。
マンガーです。

「いかがでしょ？私の作った最強のゴーレムです。」

「な、中々強そ�ですな。ですが私の風には残骸となり果てるのが見えてしまいます。」

「もう攻撃して結構ですよ。こへりでも攻撃してください。」

ギターはオレの話が終わると同時に偏在を作りカッタートルネードやタイフイーン、

その他自分の持つ魔法を全力でぶつけてた。

だが・・・・。

「な、何故壊れぬ。

私の風は最強のハズだ。」

「・・・・・愚かですね。自分の能力こそが最強と信じるのは自由ですが、

他人に押し付けるのはいかがかな?と思ひます。

この「T-レムは超合金と言う最強の鉄で練成されています。マグマの中でも解けぬ強度があります。

この程度では破壊する的是不可能ですよ」

「・・・・・それならタロウ殿、貴殿に決闘を申し込む。種田は風同士で望む。」

「・・・・・構いませんが、もし敗れたらどうするのですか?」

「敗れたら私は辞職する。恥を晒してまで働く気は無い。」

言いましたよ。この方。

すべての生徒が居る中で・・。

良いでしきう。

貴方の最後の授業、派手に散らしてあげます。

決闘前にギターに怪我や被害は敗北者の負担とする、などの取り決めも行います。

さて・・。

殺りますか・・。

自分と生徒に被害が及ばない様にシールド魔法を施しておきます。

「レはアニメに良く出るバリアーをイメージしました。
試しに生徒に向けて軽い火炎弾をブチ込みます。
ウム・。彼等には埃ひとつ付きません。

さて、ギター君を殺りますか・。」

「ギター殿、先程同様に貴殿に優先権を譲ります。
私にいくらでも攻撃を仕掛けてください。」

ギターはオラに向けて色々な攻撃を開始しました。
バリアを張つてるので、全く届きません。

十分は攻撃を続けたでしょうか・。」

彼は魔力が枯渇したみたいで、攻撃を止めてしまいました。

「おや、もう終わりですか？
まだお茶も飲み終わっていないのに。」

そう、オラはギターの攻撃の最中に紅茶をクリエイトし、ティータイムを楽しんでたのです。

ギターはフヌヌヌヌヌ・・、と面白い顔をしています。

「それでは私の番ですね。しっかりと防御してくださいよ。」

「チョッ、待て。私は魔力が尽きてるのだ。」

「知りません。ゴーレムと決闘で優先権はすべて渡したのです。
今度は私のターンです。」

ギターに向けて氷点下の風をイメージした烈風魔法を彼に浴びせます。

もちろん死なない程度に加減しましたけどね
一撃程度加えたらヤツはピクリとも動かなくなりました。

何だ。

コレで終わりですか・・・。

生徒に彼の救出を頼み私は校長室へと・・・。

「オスマン殿、遠視の魔法で見てたと思ひますから」存知とは思いますが、

ギター殿から決闘を申し込まれ、彼は負傷。

ああ、決闘前の彼から敗北したら辞職すると言質を頂いておりますので、

負傷の治癒が終わり次第叩き出してください。

あんな決闘ジャンキーは生徒を教える資格はありませんな。」

「そ、そうですな。タロウ殿。ハハハハハ・・・。

分りました。ギター殿は自己都合の退職として処理します。」

オラはオスマンの部屋から出ると生徒の待つヴェストリの広場へと移動した。

それも一瞬でね。

彼等はギターを保健室に放り込むと口々で待機してたのら。

「生徒諸君、ギター殿の看護ありがとうございます。

彼は先程の言質通り、辞職となりました。

さて、コレでは君達の授業が進みませんので、このタロウ・ヤマダが風の模範を示します。

まず、風の基本、ウインドから・・・。」

前世で烈風のオカンとも対峙してますので、風は徹底的に魂に仕込

まれてます。

今ならオカソンでも叩き潰す自信ありますせ。

何せ魔力がハンパではありません。

もつとも生徒の彼等にはムチャな事は教えませんよ。エエ。。

（な、何なの・・・あのタロウの魔法は・・・。

ギトー先生の風は私の母のカリーヌよりは威力は少ないとは言え、普通なら即死レベルの

魔法だつたわ。それなのに、攻撃を受けてても平気な顔してたし、あげくには・・。

お茶を飲んでたのよ。〔冗談でしょ？？？〕

ルイズは自分が召還した彼のムチャぶりに頭が沸いてしまってたのだ。

風ヲタとキモ男（後書き）

ギター、お前の事は。。。
忘れます
ギター解雇編でした。

ギー・シュー君とキモ男君（前書き）

ゆつやく監のオモチャヤ、ギー・シュー君、爆登場です。

ギーシュ君とキモ男君

ボクの名前はギーシュ・ド・グラモン。グラモン家の四男坊だ。

薔薇のギーシュとでも呼んでくれたまえ。多くのレティヒがボクを支えてくれるだろう。さて、今日の授業は中々のモノだつた。

アノ、ギター殿と見慣れぬメイジ教師、タロー・ヤマダ殿の決闘だったのだ。

決闘はタロー殿の勝利だつた。

ギター先生は辞職されるそうだが、自分で言つたのだから後悔は無いだろう。

それよりも・・・。

土メイジの自分としては、あの「ゴーレム」だ。

タロー殿の作り上げたゴーレムにはボクは感動した。ギター先生の繰り出す風魔法をすべて受け止めて、傷一つ付かない最強のゴーレム。

防御ばかりだったので、攻撃を見ていないが・・・。もし攻撃を見れるなら、どうなるか・・・。

楽しみだ。

授業が終わり、解散と言つ事になつたのでボクは彼の元に近づき質問した。

「タロー・ヤマダ先生、先程の授業は素晴らしかつたです。
所で・・・。」

「ン?ああ、何か聞きたい事でもあるのかね?
んつと、名前は・・・。」

知つてゐるけど一応聞いておかないとね

「ギーシュ・ド・グラモンと言います。

得意の魔法は土魔法です。まだドットですが……」

「ギーシュ君と呼んで良いか? タロウ・ヤマダです。ヨロシク。」

一応フレンドリーに握手を求める。

「タロウ先生と呼びますね。ヨロシクお願いします。質問と言いますか、見せて欲しい事があるのであります。」

「何でしょ? …。」

「先生の作り上げたゴーレムの攻撃方法を見たいのです。」

「フム…。先程の授業では防御ばかりでしたからね。攻撃方法は色々とありますよ。工具、色々とね」

「そ、そうですか…。」

「…でしたら課外授業として見せて頂く事は出来ませんか?」

「良いですよ。ただ攻撃するの見せても納得出来ないと思つますので…。」

ギーシュ君、キミの作るゴーレムを破壊して見せます。

四種類の攻撃方法が出ますので四体のゴーレムをキミの持つ魔力をこめて、

頑強に作り上げてください。

準備が出来たら、一体ずつ攻撃します。」

「分りました。所でボクのゴーレムから攻撃しても？」

「モチロン〇〇ですよ。カカシでは何の意味もありません。」

分りました、とギーシュが言つと、

彼は全魔力を込めて薔薇の杖でゴーレムを練成し始めました。

相変わらずのワルキューですな。

それでも昔の彼のゴーレムよりは頑丈そうです。

最初から4体と決めたせいもあるとは思いますが。。。

「準備は出来ましたか？ギーシュ君。」

「大丈夫です。

ボクの作れる最強のワルキューとして念入りに作りました。」

・・・・・。

そうですね。

昔の彼のワルキューよりは強そうです。

まあ良いでしょう。

では遊びましょうか。

「ギーシュ君、キミのゴーレムから私のゴーレムに攻撃を仕掛けた
まえ。

五分はキミのターンだ。五分したら反撃を開始する。」

「わ、分りました。タロウ先生。」

そつからば、ギーシュは必死でゴーレムを操りマジ ガーを叩く、蹴る。

刀で刺すと色々と攻撃しました。

ええ、すべてカンカンと軽い音がするだけで傷も付きません。

当然です。マジン一ノはスーパーロボット。

この程度で傷が付くのはあり得ません。

相手出るのはアシュ 男爵が率いる奇怪獸軍団だけですよ。

「・・・。五分経ちましたね。

では私のターンとします。

ギーシュ君、ゴーレムが傷つくといけませんので分散させて移動始めてください。」

彼は私の指示に従い、ゴーレムを全力で走らせています。
まずは・・。

「ロケットパンチ。

そう、当時の良い子の皆が度肝を抜かれたアレです。
腕が外れ、轟音を上げてワルキューに飛び掛ります。

ビーーーん

一撃で粉碎。

ま、この程度は当然ですな

「ナ・ナ・ナ・ナ・何ですか？それは・・。」

「ロケットパンチと言います。腕が飛び相手を粉碎する攻撃ですよ。
まだまだ続きます。さあ逝きますよ 」

それからはルストハリケーン、光子力ビーム、そして・・。

「ブレストファイヤー——」

ギーシュは真っ青です。

彼のワルキューレ君は最後のブレストファイヤーですべてドロドロに溶けてしましました。

生徒は全員、このイベントを見学してて固まつてました。

「……ボ・ボクのワルキューレが……」

「……ギーシュ君、これで課外授業は終わりとします。後片付けは頼んでおきますよ。」

放心してる彼を放置して、オラは職員室へと引き上げます。

イジメでしたね。これは……。

生徒達は放心してるギーシュを放置して全員、匈いはんを食べるために食堂へと

引き上げてしまいました。

ギーシュは数時間、その場で固まつてたとか……。

「……ボ、ボクのワルキューレがあああああ……」

ギー・シユ君とキモ男君（後書き）

ギー・シユとのイベントは形を変えて行いました。
今宵の更新は「」までとします。

職員室にて・・・（前書き）

ついでにキモ男のキモ男たるべ話を。
全然キモク無いチートじやんと思つてゐる方。
キモ男は変わつていません。
変態ヲタですよ。

タロウです

ギーシュとのイベントを形変えてしましましたが、アレは迷惑なイベントなので、ま、口上としましょ。
さて、お皿はどうしましょ。

あの騒ぎの後ですし、アルウェイーズに行くと大騒ぎになると思いまして・・・。

シエスタを見かけたので、彼女に厨房に案内して貰いますか・・・。

「シエスタさん」、ソーロのギャラリー、キモツとか言わないでね。キモ男ですが・・・。

「アラ? タロー様、今朝は色々とありがとうございました」

シエスタさん、「機嫌ですね。

「どう致しまして。所でお願いがあるのですが。」

「何でしちゃう。私に出きる事なら何でも致します。
ええ、何・で・も・ね・」

オラはこの何でもと言つのが文字通り、何でもを意味してるとほんづいていなかつたのです。

シエスタさんは既に肉食獣のスイッチが入っていたのですよ。ガクブル・・・。

「色々とやらかしてしまって、食堂で食べるのがアレなんですよ。
で、量も多いので出来ましたら厨房の方の賄いを頂けないかと思いまして。」

「アラ？ そんな事で宜しいのですか。
でしたら私が調理人のマルトーさんに頼んであげますわ！」

「おお、マルトーのオヤジも居たか・・・。
彼は好きなキャラなんですよ。」

シェスタの案内で訪れた厨房はかつての厨房と変わっていません。
中に居るメンツもかつてのままであります。
懐かしいですね・・・。
色々と世話になりましたから。
少しホロリとした感傷に浸つてると、シェスタが怪訝に思つたのか
質問して来ました。

「タロー様、ココが厨房ですよ。」

「あ、ああ、そうですか。いい匂いがするなと思つてたトコです。」

「・・・そうですか。では入りましょう。」

シェスタの先導で厨房に入るとマルトーを始めとする厨房の料理人
達が、
デザートの製作に大忙しでした。
いいのかしら・・・。
こんな時に来て・・・。

「マルトーさん、この方がタロー・ヤマダ様です。
お腹はコチラの賄いを出して欲しいしそうですが。」

「ん？ おお、アンタがあのギターを呴き出してくれた新任の教師か？
今、オレ達の間でウワサしてたことだぞ。良くあのギターを追い出
してくれた。感謝するぞ。」

何かしてたのですかね。ギターさん。

凄い嫌われっぷりですよ。

前世でもココまでは嫌われて無かつたと悪いますが。

「タロー・ヤマダと言こます。マルトーさんで宜しかつたですか？
お世話になります。」

「いや、世話になつたのはオレ達だ。

あのギターにはオレ達は散々な目に遭わせられたからな。
魔法も使えないオレ達に、ヤタラと風がどうのとか、標的にして怪
我させられたりとか。

惨い事ばかりしやがつて。

オスマン校長に訴えても聴いてくれなくて困つてたんだ。
だがアンタがヤツを潰してくれたおかげで、オレ達の被害は終わつ
た。

何でも徹底的に潰してくれたそつだな。

オレ達の盾として戦つてくれた本当に感謝する。
なあ皆。」

「「「そうですぞ。タロー・ヤマダ殿はオレ達の盾です。」「」」

「お前の事はオレ達の盾と呼ぶ事にしよう。
オレは嬉しくてお前にキスしたくなつたぞ。」

「いや・・自分はノーマルなのでヤローからキスされるのはイヤです。

遠慮しちゃいます。

それよりも軽いを頂けませんか？

昼からも授業が入りますので腹ペコでは動けません。」

「ああ、忘れてた。今すぐ準備してやる。少しだけ待て。」

マルトーは軽いとは思えぬスープとサラダ、そして一番いい部分のパンを出してくれた。

腹も膨れたので、オレはマルトーに礼を言いつゝ、厨房を辞すると広場の片隅で休む事にした。

「フー、疲れた。

相変わらず飛ばしてくれますよ。マルトーさんは・・。
ん・・いい素材となる木が落ちてますな。
ちとオモチャでも作りますか・・。」

オレはそれを拾いつゝ、職員室の自分の机に帰り、そこで木材を加工する事にした。

「んつと・・。テファはさすがにヤバいので・・。
見られても大丈夫なのに加工すつか。
ンジャ・・・・・・。」

しばらくオラは木材の加工とクリエイトに熱中してた。
思い浮かべたのは、現世で話題となつた某アニメ。

ホラ、友達が居ないとか言つ癖にリア充してたアレのキャラの妹ですよ。

あの子ならこの世界に居ても不思議では無いキャラです。
フフフフフフフフフフ・・。

我ながら快心の傑作です。

見事にKO鳩ちゃんとンコシスターの絡みを作れました。
あの二人の絡みはホンマに和ませて貰いましたからね。
最終回だったのが残念。

有中部で動画見れますから、二期も見れるとは思いますが。

ン？？？？

何で皆様、コチラをガン見してるのですか？？？？？

「タ・タロウ先生、それってタロウ先生が作られたのですか？」

「ええ、私の趣味の一環ですよ。キリッ」

「素晴らしい出来ですね。売り出しても絶対に売れると思いますが・。
・。」

誰でしたかしら?

原作にも居なかつたキャラの先生です。

彼の背後からは私と同ジヲタの空気が漂つておりますが・・。

「すいません。まだ同僚の方の名前を存じ上げていませんので。
宜しければお名前を伺つてもよろしいでしょうか?」

「おお、名乗るのを忘れてました。

私は風系統の魔法教師助手をしてます、アキバ・オオスと申します。

何ですか？モロにアタの聖地を使つたっぽい名前は。
しかしこの世界でアキバなんて・・・。
何て素晴らしいのでしょうか。

そりゃええば風の助手と言いましたね・・・。聞いておきましょ。

「風の助手をされてるのですか？先程ギター先生は退職されましたが。」

「モチロン聞いています。で、次の風教師はタロウ・ヤマダ殿と決定しました。

貴方が私の上司となります。ヨロシクお願いします。」

彼が助手ですか・・・。

でしたら仲良くしておられべきですね。

では、コレは彼に差し上げますか。

どうせ片手間に作り上げた品ですし・・・。

「分りました。アキバ・オオス先生。宜しくお願いします。
私がタロウ・ヤマダです。

で、どうでしょう。お近づきの印にこの人形をプレゼントしたいと思いますが。

迷惑でしょうか？」

すると・・・。

「ほ、本当にいいのですか？いや、素晴らしい出来ですし、見るだけでも幸せだと

思つてたのです。まさか頂けるとは・・・。

ああ、夢の様です。」

チーン

この方もヲタク確定です。

同僚となる方ですし、色々と楽しく仕込みますか・・。

その後アキバ君に色々とヲタ情報を話したり、フィギュアの事を教えたりして楽しい一時でした。

やはりこの世界も「染める」べきですね。

リア充となるうが、ヲタは不滅です。

またフィギュアショップ作るどおおお。

あ、始業時間だ。

次の授業はシュヴァールズ先生だな・・・。

職員室にて・・。（後書き）

タロウはリア充になつてもヨタは止めません。
また店を作ろうかな・・。
ふう、いい仕事でした。

ルイズと彼（前書き）

彼が登場です。

ルイズと彼

タロウです。

いやアキバ先生ってマヂでヲタの素質が在った方でしたよ。色々と情報を聞き込むと、幼女が大好きだとか。

もちろん実際に手を出すとかは妄想もしていません。

ただ眺めて愛でるのだけで満足してたそ�で。

この学院は幼女に近い生徒も多いので、中々良い環境だとか・・・。アキバさん・・・。

マヂで手は出してはダメですよ。

この世界の法律がどうかは知りませんが、犯罪には変わりませんからね・・・。

さて授業の見学でもするべ・・・と考えてたら、背後から・・・。

「タロウ・ヤマダ先生。」

「ン?どひしました。ルイズ嬢。」

「午後の授業は使い魔のお披露目を兼ねているのです。

で、あのおおお・・・。」「あそこで只今還する約束でしたからね。」

「分りました。今まで言わなくても結構です。

では校長室に行きましょ。」

あそこで只今還する約束でしたからね。」

さて・・・彼を呼び出すか・・・。

この世界でもルイズの虚無は発露させないつもりです。お子様が戦争の道具にされるのは悲劇ですもん。

悪い日は潰しておくべきです。

ゼロ様にお願いして彼女の虚無体质を剥奪しておかないと。。。

オラはルイズ嬢を引き連れ、校長室に到着一応ノックします。

「オスマン校長、タロウ・ヤマダです。ルイズ嬢の件でお伺いしました。」

「タロウ殿か？入りたまえ。」

許可出たので入ります。

そう言えばマルトーのオヤチの訴えを無視してたつついでたな。少しお灸を吸えておくか。。。

中にはマチルダさんとオスマンが居ます。

「ルイズ嬢が昼の授業で使い魔お披露目があるとかで、使い魔を献上する約束を果しにきました。」

「おお、そうかね。

ミス・ヴァリエール。良かつたね。」

「ハイ。でもどんな使い魔が来るのでしょうか。」

「チョイお待ちを。

あまり時間もありませんのでチャツチャツと付けてしまいますね。

「

オラは頭の中で「彼」をイメージし、彼を異界に呼び出す事にした。

「Peso2、出でよおおお。」

激しい光が出現。

ガン見してたオスマン達は、

「目があああ。」と光に目を射られたらしごつス。

お約束ですな

やがて光が収まると・・・。

そこには「彼」が居ました。

「クエツ?」

「彼がルイズ嬢の使い魔となつて頂くペソペソです。
Peso2とでも呼んでください。」

少しあ待ちくださいね。彼に納得してもらいますので。」

オラは念話で彼に話しかけ、ルイズの使い魔として遊んでヤレと頼んでた。

ペソペソはメシとフロはあるべな?と聞いて来たので冷蔵庫の部屋も設置した。。

と、約束したら彼は納得してくれた。

「・・・終わりました。

彼の名はペソペソ。異界に居る温泉ペンギンです。
ルイズ嬢、彼の居室は私がプレゼントしますので夜にお邪魔します
よ。

ああ、彼はお風呂が大好きですので、

毎日の入浴は必ずご一緒にお願ひします。

男性つづても彼なら女性のフロでも大丈夫でしょ？」

ルイズはフリーーズしてたが、やがて・・・。

「口、口・口・口・口・口・・・・・・」

「口ケ口シ口―――」

思わず突っ込んでしまいました。

「違うわよおお。私は二ワトリでは無い。
コレが私の使い魔になるの?
何て・・・・カワイイ」

やはり双月の世界でも女性のストライクゾーンは変わりませんね。
お子様や女性はペンギンが大好きです。

普通のペンギンなら過酷な人間環境で生きるのは大変ですが、
あの桂木亭の夢の島で、生き抜けるタフな彼なら、
このハルケギニアで立派に戦ってくれるでしょう。
モチロン愛玩ペットとしてですよ。

「彼は魚介類が好物ですので、食事の時はご一緒に与えてください。
さつ、ペソペソ。お前のご主人様、ルイズ嬢に挨拶しなさい。」

彼はクエツと言つとペタペタヒルイズに近づき、右手？を差し出す。

「ホラ、ルイズ嬢、彼が挨拶しますよ。握手して自己紹介してね
」

「クエツクエツ」

「ペソペソ、

私が貴方のご主人様となるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・
ド・ラ・ヴァリエールよ。

ルイズでいいわ。

ヨロシクね。ペソペソ。」

「クエツクエツ」

ウム・・・。おおむね好意的に交流出来そうですね。
やはり彼女には彼を使い魔とするよりは、こいつ動物を使い魔に
するのが一番ですよ。
さて、使い魔の件はコレでヨシとして・・・。
オシオキして置きましょう。ヤツに・・・。

「ルイズ嬢、彼を連れて教室に行きなさい。
歩くのが遅く思う時は抱いて歩いてもOKです。」

「だ・だ・だ・だ・だ・抱いてもいいんですか?
ンナ可愛い生き物を。」

「貴女の使い魔ですよ。大切に扱ってくださいね。」

「モチロンです。タロー先生、ありがとうございました」

ルイズの私に対する好感度は少しは上がったみたいですね。
ま、いいでしょ。

さて、彼女が退室したら・。

「オールド・オスマン殿。

自分は本田、厨房で賄いを頂いたのですよね。
そこで・・楽しい話を伺いました。」

「な・・・ナーモしてないぞ。ワシは。」

「ええ、ナニもしてないですね。本当に。
貴方はこの学院のトップですよね?」

「やうじやが・・・。」

「それなのに厨房の調理人がギターから苛められていると言つ陳情
を無視してたとか・・。

彼等はギター退職を聞き大喜びで泣いてましたよ。

どうしてトップである貴方は彼等の陳情をシカトしてたのですか?
ロングビルさん、ヤツを取り押さえてください。」

「フフフフ タロー様、了解です。」

オスマンが脱走する前に彼女にヤツを捕縛して貰いました。

「や、止めてくれえええ。」

「彼等の苦しみを味わって貰いますか・・。

魔法無効、そしてヤツの魂を地獄の煉獄に一日封印。 「

オスマンはピクリともしなくなり、動かなくなりました。

「タロー様、彼は・・・」

「ヤツの魂を一日、地獄の煉獄に封印しごきました。平民の皆様の苦しみの一部にしかなりませんが、彼も懲りると思います。」

「ま、それは良い事を。

では彼の管理は私がしておきます。

明日まで放置しといて良いのですよね。」

「ええ、肉体は生きてますので。ま、多少垂れ流したら掃除だけお願いします。」

「お任せください」

「

オスマンは翌日、現世に戻るまで地獄のオーネに叩き潰され煮られ焼かれて・・・。
地獄ツアーを楽しんで来たらしい。

数日ガクブルが止まなくなり、オラの顔見たら逃げる様になりました。
くけけけけ。
少しは懲りただろ・・・。

ルイズと彼（後書き）

彼とルイズの生活に幸多からぬ事を。

オスマンは不憫ですね。

宜しければご要望などを入れて頂くと助かります。

私はただの・・・トライアンクルですから（前書き）

の、シユヴールズ先生の巻です。

私はただの・・・トライアングルですから

タロウです。

オスマンの管理をマチルダさんに頼み、オラはショーヴールズ先生の授業見学に来ました。

オヤオヤ、ルイズ嬢の周囲が賑やかですね。
早速ペソペソと戯れて楽しんでいるのでしょうか。
ま、楽しく生きてください

「皆さん、春の使い魔召還は大成功の様ですね。
このショーヴールズ、
こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみ
なのですよ。」

ルイズは二口二口してた。

「まあ、ミス・ヴァリエール。とても愛らしい使い魔を召還したの
ですね。
それは・・・？」

「私の使い魔、ペソペソです。異界の温泉ペンギンと言います。
オフロが大好きだと言う事です。」

「ルイズ、その子、お風呂に入るの？私も一緒にに入るからさ・・・。」

「イ・ヤ・ 私のペソペソに触らないで。」

「ゼロのルイズ、そこ等歩いてた動物を浚つて来たのだろう？」

「失礼ね。ちゃんと召還したわよ。」

「ウソつけ。ゼロのルイズの癖して。」

「ミセス・シュヴァーレズ。侮辱されました。かぜっぴきのマリコルヌが私とペソペソを侮辱しました。」

「かぜっぴきだと？ オレは風上のマリコルヌだ。風邪なんかひいてないぞ。」

シュヴァーレズ先生は手に持った杖でマリコルヌに向けて振ると・・・。彼は糸の切れた人形みたいに椅子にへたりこんだ。

「あまりお友達を罵倒するといけませんわよ 皆様」

シュヴァーレズ先生は氷点下以下の冷たい顔でマリコルヌを睨みつけてたのです。

マリコルヌはカクカクと首を振り、彼女に従つしかありません。さて、いよいよ楽しいお勉強の始まりです。

「私の一つ名は「赤土」。赤土のシュヴァーレズです。そう言えればタロウ先生は全系統がお得意だそうですね。先程のゴーレムは見てましたが、本当に見事なゴーレムでした。

私にはとても作れそうにありませんわ。」

いきなり話を振り切つたぞ。この バハン。

「『紹介が遅れて申し訳ありませんでした。

私は異国のメイジ、タロウ・ヤマダと申します。

ギター先生の退職で後釜に入る事になりましたが、一応・・・。赤土も使えます。でもこの国の魔法はあまり拝見していませんので、シューヴールズ先生の見本を見せて頂けませんか？

自分がこの国の魔法だとどのレベルにあるかは、分りませんので。見本の後に私も真似して見ます。」

「ま、素晴らしいお話ですわね。では、この赤土のシューヴールズ、お手本になるかは分りませんが全力を尽くさせて頂きます。」

シューヴールズ先生はギターとは違い教え方も丁寧ですね。この方は絶対に残つて貰うべきです。ハイ。

彼女が杖を振ると、教壇に乗つてた石ころが光輝きピカピカの金属に変わつたのです。

「せ、先生。それはゴールドですか？」

褐色の肌のナイスバディの生徒、恐らくキュルケでしょう。彼女がシューヴールズに質問しました。

「違います。ただの真鍮しんちゅうです。『ゴールドを練金出るのは、スクウェア』クラスのメイジだけです。

私はただの・・・。」

「「トライアングル」ですから・・・。」

やはりこの世界でも彼女のセリフは変わりませんね。

さて・・。

自分も全力を尽くして見ますか・・。

彼女も自分の能力を全開で見せてくれましたからね。礼儀として自分も手抜きナシで頑張つて見ます。

「シユヴールズ先生、見事な真鍮ですね。
では自分も真似して頑張つて見ます。」

そう言うと彼女から手ごろな石を譲つてもらい、教壇の上に置く。彼女の練成した真鍮モダキは別の場に移しましたよ。HH。

「ではやつて見ますね。もし危険と感じたら即刻止めますが、大丈夫と判断できたら、最後まで練金して見ます。」

「楽しみですね。タロウ先生・・。」

「フム・・・。全力を出すと騒がれる危険もあるが、あまり手抜きしてもね・・。んじや銀辺りで止めて置きましょう。出でよ、シリバーリー

すると・・・、教壇の上の石が光り出し注視する事も出来なくなつたのです。

しばらくすると、光は收まり、教壇の上にはギラギラと輝く・・。

「い、これは・・。銀ですか？」

「ハイ。銀をイメージしましたが。調べて頂いて結構ですよ。」

「分りました。ディクットマジックで調べて見ますね。少しだけお待ちください・・・。」

そう言つと彼女は杖を振るいオラの練成した銀の石を調べ始めた。

すると・・・。

「す、素晴らしいですわ。

先程までの石を完璧な銀に練金してしまつとは・・・。タロウ先生の土魔法の実力は私よりも遙かに上です。もしかしたらスクウエアかも知れません。

素晴らしい練成でしたわ。」

手抜きしたのだけど、この程度なら大丈夫でしょ。でもスクウエアか・・・。

前世でも到達したけど、あまり恩恵は感じなかつたのよね。それよりも、やはり土の技術だけは磨き架けて、早く店を持ちたいですよ。

テファもこの地に呼び寄せてあげたいしね。

「そうですか・・・。

私の世界の魔法でもこの世界に通じるのですね。色々と魔法の方法も技術も違いますので、参考になるか心配してたのですが。」

「」謙遜を・・・。

「」今まで見事な銀を練金出来るメイジは国中を探しても中々見つかりませんわよ。

タロウ先生、お時間の取れる時で結構ですので、ゴーレムとか鍊金についてご教授してください。」

それからオラは授業の合間に自分の趣味に没頭し、
彼女に怒られたのは言つまでもありません。

ん・・・。

そう言えばこの授業でルイズが教室爆破事件を起こすハズだったな
・。
ま、いいか。
迷惑なイベントだし・・・。

私はただの・・・トライアングルですから（後書き）

穏やかな授業でした。

次回からはアレなイベントが始まります。

良い子の皆は飛ばして見ないでね。

ウフフな夜（前書き）

さて、皆様、お待ちかねのウフフタイムです。

ウフフな夜

タロウです。

シユヴールズ先生の授業の後、自分の住処を作るためオスマン氏から指示された、

学院外の空き地に居ます。

ココに自分の新しい住居を鍊金して作るのですよ。

やはり貴賓室では落ち着きません。

さて、始めますか・・。

まずは土を掘り下げ地下室の土台から作ります。

いえね、前世で烈風オカンに家を破壊された時から考へたのですよ。

大切なモノは地下に置くべきだったのでは・・と。

数メートル掘り下げ、周囲をガツチリと鍊金で固めます。

ええ、核攻撃でも生き残れるレベルにしますよ。

もうあの悲劇は味わいたくありませんので。

そして柱をガツチリと立て、周囲を土壁で固めてから鍊金。

コレなら台風や雪崩でも耐えられると思います。

魔法つて魔力の多い人間には本当に便利です。

こりゃハルケギニアで化学が発達しなかつたのもムリではありますわ。

今回の人生は成り行きに任せると決めたので、魔法が便利なら頼る。慕う人が居たら取り込む。

抱いてと言われたら・・・。

ゲフンゲフンな関係もOKとしますよ。エエ。

下手に遠慮して関係を壊すなら、遠慮せずに行動し、関係壊す方が千倍はマシ。

ブツブツと独り言を言いながら、血宅の鍊金を続けてたら・・・。

アレまあ。

完成してましたよ。

規模は鉄筋三階立てレベル。

地下は一階あります。

周囲は堀で囲い、後でアクア様をお呼び出せる池も・・・。

つて・・・もう居たのですね。

アクア様・・。

（タロウよ、良くな池を作ってくれたな。
中々居心地も良さそうだ。）

私はココをしばらく宿とするぞ。

ラグドリアン湖には分身を置いてある。（

「はあ、お呼びしようと思つてたら来られたのですね。
アクア様、狭い池ですがお許しください。」

（狭くとも楽しい我が家となつた。タロウよ。）

アクア様も引っ越された事ですし、自分も少ない手荷物を持ち込みますか・・。

「シエスタさん、自宅が出来たので引越し致しますね。

お世話になりました。」

「寂しくなりますわ。タロウ様・・・。」

寂しいって・・・。まだ一日居ただけですよ。

この部屋。

手荷物も少ない事ですし、

チヤツチヤツと移動して、フロでも入って屁こいて寝ます。

そしたらシエスタさんが、お荷物を自宅まで運びますとか言つので、甘えてしまいましたら、門のアーチでマチルダさんが待ち構えてたのですよ。

「ロングビルさん、じんばんわ。やつと自宅が出来ました。」

「タロウ様、僕の私を置いて出て行くなんてあんまりですわ・・・。」

僕つて・・・。

ライライ、昨夜、アクア様に言つたのはマジでしたか??

「私の窮地を救つて頂いたタロウ様は私の永劫の主人様です。もう秘書は辞職しましたので私はフリー。

さあ、私のすべてを貰つてください。」

ロングビルさん、いやマチルダさんがそう話を始めたらい、シエスタさん・・・。

手荷物をポートリと静かに置き、学院にダダダダと駆けて行かれたのです。

どうしたのかね？

自宅に入り、手荷物を簡単に片付けフロの準備をしてくると・・・。

コンコン・・・。

ドアを叩く音がします。

マチルダさんは食事の支度してくれますので・・・。
誰ですかね・・・。

外を見るとシェスターさんが大きなカバンとミシンを引きずつて来た
のですよ。

ゼーハーゼーハーと凄い荒い息しますが・・・。
体力ありますね・・・って・・・違います。

何ですか？この荷物は・・・。

「シエスターさん、こんばんわなのですが・・・。
どうしたのですか？この荷物は。」

「タロウ様がロングビルさんを雇用なさると聞いて、私も雇用して
頂こうと、

学院のメイドを辞職して参りました。
給与はいくらでも結構です。

タロウ様、私もメイドとして雇用してください。」

・・・・・フリーーズしてしまいました・・・。

まだフラグ立てる程の事はしてなかつた・・・ハズですよね？

シエスタさん。

そりやマチルダさんはゲフンゲフンな関係持ちましたから、もう少しへこは言えませう。

ですがシエスタさんには指一本、手すら握つてませんぜ。

自分は・・。

背後から冷たい空気が・・・・漂っているのですよ。

さき・ぞ・せ・ざ・ぞ・と擬音の聞こえるみたいな感じで後ろを振り向くと。。。

卷之三

怒る気持ちは分りますが、まずは言い訳だけでも・・・。

卷之三

私と言うモノがありながら、メイドさんまで頂かれたのですか・・・

L

「…………誤解ですよ。マチルダさん。

自分は何もしていません。本業です。ね? シエスタさん

「ええ、まだ…ナ一もしてくれないのですよ。

ひどいと思いませんか？ロングビルさん

私は何時でもハサウエイなのに、
女として懇しげですわ……」

よ。ミミミミミミと泣き叫ぶシエスタさんですが、自分が泣きたいです

で、外でビーカービーキャー騒いでても話が出来ません。

まずは一人とも家に入つて貰い、話しかけてしましょうか。

「シエスタさん、ロング・・・いや、マチルダさん。まずは落ち着いて頂き感謝致します。さて、今宵の一件ですが、シエスタさんは本当にこいつ、ナニもしていません。これは神にかけても構いません。

マチルダさんに聞しては・・・・。です。ハイ。」

「タロウ様、私の事を認めて頂きありがとうございます。で、そのシエスタさんでしたか？どうしてこんなに強引にこの方の所に来られたのですか？私は先程お話した通り、色々な事でタロウ様に窮地を救つて頂きました。

水の精霊様も承認して頂いております。」

「み、水の精霊様ですか？あのラグドリアン湖の・・・」

(呼んだか？タロウの僕のマチルダよ。
そしてそこに居るのは・・・)

我の知る古き時代のタロウの僕の水の流れに似ている。
単なるモノよ。名を名乗れ。）

「み、水の精霊様ですか？

私はシエスタと言います。タロウ様のメイドとして押しかけて参りました。」

(フム・・・単なるモノはシエスタと名乗るか・・・。
遙か昔のタロウの僕の一人にもそつ名乗る単なるモノが居たと我是記憶している。)

「本当にですか？水の精霊様。

私はタロウ様にお会いした時に、すべてを投げ出してもこの方と離れてはいけない。そして今宵、タロウ様が学院の貴賓室を引き払い、この家に越されると聞いた時、

すべてを無くしても構わない。

その気持ちでタロウ様の家に押しかけメイドをしたのです。もつ魂が引き合わせたと思つた方はタロウ様だけなのです。」

（やうか・・・シエスタと名乗る单なるモノよ。

オヌシの水はやはり古き時代のタロウの僕と同じと認める。タロウよ。我の言つ事は間違つておるか？）

「・・・精霊様がそこまで言われるなら、わしひ隠す云われはありませぬ。

マチルダさんは話しましたが、シエスタさん。

途方も無い話をしますが、発狂したとか思わないでください。」

「大丈夫です。私はタロウ様の話される事なら例え、明日、ハルケギニア全土が

双月まで浮き上ると言われても信じます。」

・・・シエスタさん、風石が暴走すると冗談抜きで浮き上るのですがね。

この大陸は・・・。

ま、また何とかなるでしょ。

前世でも出来た事ですわ。ハイ。

それから、自分の昔話を始めました。

ルイズに召還されたのはコレで二度目。魔法に関しては完璧にチート。

今なら烈風のカリンでも潰せる実力がある。

そしてすべての精霊ともその時代から通じてる。

この世界に住む人間なら誰でも知ってるブリミルの最後の事も・・・。そして多くの妻 ズの事も・・・。

話が終わりしばらく沈黙が続いた。

先端を切ったのはマチルダ。。

「そうでしたか・・・。

ですがそれなら、すべてに合点が行きます。

私は貴方に抱かれた時、もう何も要らない。

そう思いました。

ただ、アルビオンの妹の事だけは心配でしたが。」

「私も・・・。

タロウ様の言われる事はすべて真実と思います。

そうで無ければ、生娘の私が異国の男性にいきなり惚れる訳がありません。

恐らく魂が呼んだのだと思います。

タロウ様、もしうお金が苦しい時は、私を女衒に叩き売つても構いません。

どうか私を「」に置いてください。」

・・・シエスターさん、女衒に叩き売るなんて凄い事、出さる訳無いつ
しょ。

それからアクア様も交え、今後の事を色々と話し合つたのです。

その後・・・・・ゲフングフン・・・。

二日続けて徹夜に近いのにアクア様、私の健康だけは治してくれる

のですね。

寝てないのに元気な自分って、悲しいです。

シクシク・・・。

ウフフな夜（後書き）

いよいよ妻 ズの結束が始まります。
食われたのか食ったのかは藪の中の事にしますね。

ルイズと彼 2（前書き）

ルイズと彼のお話です。

ルイズと彼 2

私の名はルイズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。誇り高きヴァリエール家の惨女よ…。

チヨツ、そこのアホ作者。アンタバカ？

字、間違てるわよ。

脳が沸いているんじゃ無い？

私は三女なの……。

もういいわ。

昨日の召還の儀式では散々な事だつたけど、私が召還した異国メイジ。

タロウ・ヤマダって人、思ったよりいい人みたいね。

確かに魔法の技術は凄い。

ひょっとするとお母様ともタメ張るかも知れない。
だけど私には関係無いわ。

だつて・・・私は・・・ゼロのルイズ・・。

魔法が成功したのは昨日の召還の儀式のみ。

契約は出来なかつたけどね。

でもタロウ先生が私との約束をしっかりと守ってくれた。
使い魔としての存在の彼を私に授けてくれたのだ。
彼の名はペソペソ。

お風呂が大好きな温泉ペンギンと言つ珍しいペンギン。

ペタペタと歩く姿は今回の召還で出現した使い魔の中でも一番の可愛さと血漫出れる。

あのキュルケも羨ましそうに見てたもんネ

久しぶりに快感を味わったわ。

でも彼つて本当にキュート。

確かにブレスを吐くとか、空を飛ぶとかは出来ないわ。
でもね。

凄い癒してくれるのよ。

存在が神よりも貴重なのって彼くらいよ。きっと・・・。
ちい姉さまが動物を可愛がる気持ちが始めて理解できたわ。
お風呂に入るとパタパタと元気良く泳ぐし、皆は触りたがる。
体をブルブルと震わせてお湯を飛ばすトコなんか皆で大笑いしたわ。
でも、彼、凄いのよ。

私が散らかしてたパン とか下着をキチンと籠に入れると、
箒を使って掃除はする。

それに私の言葉も理解出来るみたい。

もちろん私は彼の言葉が分らないけどね。

でもそのウチに理解出来ると思うわ。

だって私の言葉に色々と楽しく反応してくれるモン。

タロウ先生に後で聞いたら、人間の子供位の知恵があるんだって・・・。

掃除出くるペンギンなんて彼くらいよ。

本当にアタリの使い魔だったわ。

ふう・・それにしてもタロウ先生、遅いわね。
もしかして忘れたの??

彼の寝床の事。

仕方ないわ。

今日は私のベッドで寝て貰いましょう

モフモフしてカワイイ

おやすみなさい・・・。

クエックエック（オレの冷蔵庫は？？）

ルイズと彼 2（後書き）

彼とルイズのお話2でした。
冷蔵庫設置するの忘れてたので・・。

朝（前書き）

朝です。

タロウです。

夜が明け、朝となりました。

新居の新しい家にはガツチリとしたベッドも作って置いてあります。ですが、このガツチラした広いベッドは凄く狭く感じます。

両サイドから抱きしめられて寝てる訳ですからね。

彼女達に。

昨夜からゲフングフンな関係となつてしまふシエスタも私の隣に寝てます。

ファ・・・アーハ・・・。

完璧に寝不足ですよ。

ビッシュミショ・・・。

(タロウよ、お前の体調維持は我に任せひ。例え病に倒れても確実に治癒して見せる。)

アクア様は、そう言わると自分の身体にダイブして通過されてしましました。

そしたら身体の不純物や疲労、その他がすべて取り除かれてしまうのです。

精霊様が居たら、医者なんて絶対に要りませんね。

医者頃しですよ。ハイ。

何故か彼女達もダイブされたらしく、彼女達もスッキリした顔で目覚めています。

「二人ともオハヨ・・・。

精霊様が自分達の身体を通過してくれたので、爽やかになつてると思つんですが。」

「タロウ様、おはようございます。

そなんですか？ そう言えれば私の身体も色々とスッキリします。
精霊様のおかげなのですね・・・」

「ありがたい事です。水の精霊様・・・。」

体調が万全になつた事を確認したオレ達は、ベッドを出ると、色々と散らかってる部屋を片付け、朝ごはんの準備にかかります。いえ、シエスタさんが昨夜退職する時に、厨房から色々と預いて来たみたいで、すぐにご飯の準備は出来てしましました。

「タロウ様、この家の管理は私がキッチンとしますので、お仕事は頑張つてください。」

「タロウ様、学院での雑務は私が見ますので、ご安心を。」

本当は一日でも早くティファニア達を呼んであげたいのですが、この土地は借り物。

まだ自宅以外の用途には使えません。
彼女達がこの地に来たら・・・。

お店を開きたいですね。

さて・・支度して学院に行きますか。

そつ言えば、何か忘れてた気が・・・。

「あ、――！」

思わず大きな声出してしまいましたが、「彼」の寝床を設置するの忘れてました。

家作りとショスタさんの騒ぎで完璧に忘れてたのです。

大丈夫だとは思いますが、彼が健康を害するのは良く無いのです。
早速女子寮に出かけましょう。

「マチルダさん、少し急用が出来ましたので、ルイズ嬢の部屋に出来
かけて来ます。

終わり次第職員室に向いますので。」

「分りました。私はタロウ様の授業の準備などを済ませておきます。

」

やはり彼女は素晴らしいですね。

オスマンもそろそろ現世に帰る頃でしょうが、机の上には辞職届け
が置いてあるそうです。

さぞやビックラするでしょう。

まあしばらくは一人で頑張つてください。

さて、女子寮に参りました。

ですが、さすがにいきなり入るのは気が引けるのです。

誰か居ないかな・・・。

「あら? タロウ・ヤマダ先生ではありますか?」

「この声は・・・。モンモランシー嬢ですか?」

「ハイ、モンモランシーです。先日はありがとうございました。
おかげで悩みの一つが消えて、快適な生活を送っています。」

育った2つの胸をブルンと震わせ彼女は嬉しそうに言います。
良かつたですね

で、彼女の案内でルイズの部屋を訪ねる事にしたのです。ついでに一緒に居て貰います。

さすがに女子寮に男性が入り、一人つきりとなるのは色々と問題です。

「ルイズ、タロウ先生が貴女に用があるそうですよ。」

「モンモン？ タロウ先生が来たの？ すぐ開けるわ。」

彼女はペソペソを抱いて寝たせいか、肌がツヤツヤですね。

「ルイズ嬢、彼の寝床を準備する約束を果しに来ました。モンモランシー嬢は貴女と二人きりになるのを避けるために居て貰います。

宜しいですよね？」

「仕方ないわね。いいわよ。で、彼の寝床ってどうすんの？」

「少しお待ちください・・・。」

自分は「彼」が良く使つてた冷凍庫を頭にしつかりとイメージし、クリエイトを始めました。

精霊様のおかげで体調は万全。魔力も満タンです。

数分後、彼の寝床はルイズの部屋にデンと鎮座していました。

「ね、コレって・・・。ナニ？？」

「彼の部屋ですよ。ああ、上のドアには冷たいモノを作る場となつてますので、

氷とか欲しい場合は自由に使えます。

定期的に魔力の充填に来ますけど宜しいですか？」

電力の無いハルケギニアで彼の寝床を稼動させるために魔力を機械部分に貯めて、

寝床を冷やす構造にしたのです。

下手に電力など持ち込んでも意味無いですから。

一回の充填で一月は持ちます。ハイ。

「そ、そんないモノなの・・・。

でもペソペソの嬉しそうな顔見てたら、分る氣するわ。上の部屋には氷が何時もあるのね。」

「その通りです。

氷を入れる器に水だけ足して貰えば何時でも使えます。」

「ルイズ、いいわね・・・。たまには氷を頂戴よ。」

「イヤ、コレは彼のモノなの。

何でモンモンにあげないといけないのよ。」

「まあまあ、仲良くしてください。コレは貴女の私物では無く、彼の家なんですからね。

な?ペソペソ??」

「クエックエック

「・・・もう・・・分ったわよ。あら、ペソペソ、早速家に入るの?..」

ペソペソは早速自宅に入り、自分好みに設定しているみたいですね。

暑かつたのか、中からロックをかけてしました。

「彼も異界に来て疲れたのでしょ。

ルイズ嬢、彼はしばらく休ませてあげて下さい。食事は『えてください』よ。」

「分つてます。後で厨房から貰つてきますから。」

まあコレで彼の暮らしさ大丈夫でしょう。

わて、職員室に行き、今日の授業の準備でもしますか・・。

オラは道々色々と今後の設定を考えてた。

誰かが常に周囲に居る現状では、歩きながらでないと落ち着いて考えられないの。う。

まず、何時までも学院で教師を続けるつもりは無い。

やはりヲタショップをこの世界に作るのが究極の目標。

前世みたいにロマリアがイチャモンをつけない限りは、穏やかに暮らしたいな。

だがその前に色々とこの世界に食い込んで自分の立場を明確にしておくべきだ。

何時までも異国のメイジでは、色々と不味い。

抛つて、アルビオン戦までは、学院の教師を続けよ。

ウエールズは殺さない。

彼を殺すとあの姫が暴走を始め、やがては世界の崩壊にたどり着いてしまう。

それだけは絶対に避けるべきだ。

もつともルイズはアルビオンには行かせないけどね。

邪魔だ。はつきり言うと。

ネ申様のプレゼントでオラは現状で虚無も発動出きたのだ。呪文もすべて思い出している。

最悪の事態の時以外は発動させないが、万一の保険にはなるだろ。
アホ姫がルイズに絡むイベントの時は、ムリにでも介入しルイズは
残つて貰う。

ま、この程度、予定を考えておけば良いだろ。

アキバ先生は、教師辞職時の後任に仕込んでおかないとニーヤア

朝（後書き）

彼の寝床設置イベントでした。
魔力で稼動させる設定にしておきます。
そして今後の展開も独り言調で呟いておきます。
次回から新章になります。

ただ今授業中（前書き）

タロウの授業風景つス。

タロウです。

オスマン殿は現世に帰られたみたいですが、椅子に座つたままで垂れ流し。

しかも机の上にはロングビルさんの「辞職届け」。

内容はセクハラ爺さんの面倒はもう見れません。

タロウ・ヤマダ様に永久雇用されます。と、書いてあるのだ。

タロウに恐怖心を持ったオスマンが逆らえるハズも無く、自分で床の掃除をしたり、

書類の決裁をする事になった。

秘書の募集をしたが若い女性が好んでセクハラジジイの元に来るハズも無く。

しばらく彼は一人、書類の山と戦う事になるのう。

ルイズ嬢の部屋を辞したオラは職員室に来てます。
マチルダが完璧に準備してくれてたので、後はアキバさんと打ち合わせする程度。

今日から風魔法教師、タロウ・ヤマダの出陣となるのです。
ま、長い事働くつもりはありませんがね。
さて・・・授業に入りますか・・・。

クラスは三年の某クラス。

原作にも出て来ないクラスですので、キャラと名前が一致しません。
生徒の名はAとかBで表現します。
お許しを

「えっと、私がギター先生の後任として風魔法の教師を勤める事になりました、

タロウ・ヤマダと言います。

得意な魔法は全系統です。」「

「ミスター・タロウ・ヤマダで宜しいでしょうか？」

ボクは風魔法が得意のラインメイジです。

昨日は元教師のギター先生と対決されて勝たれたそうですが、事実ですか？」

「ええ、事実です。

もつとも私は彼と戦いつもりは無く、模範演技だけのつもりでした

が。」

そう言ひと生徒達はザワザワと騒ぎ出したのだ。

まさかあのギターが敗れるとは・・とか、不意打ちで勝ったんだろう
う・・とか・・。

ふーん・・。

やはり受け入れられるまでは色々とありそりですな・・。
仕方ない。

オラは偏在を編み出し、すべての生徒一人ひとりに対峙して説明に充てる事にしたのだ。

全ての生徒、約四十人に偏在だ。
さすがに彼等もメイジ。

これがいかに凄い事なのか、ようやく理解出来たらしい。

一時間、個別に魔法を偏在が指導を続けたので彼等のオラに対する評価は、
評価は、
徹底的に改めて貰えた。

やがて休憩時間となり、偏在を消しクラスを辞すると、
彼等は自分に色々と質問して來たのです。

どうすれば偏在をあんなに大量に作れるのか？

とか、魔力は？とか・・・。

まあ機密もありますので、特訓の賜物とだけ答えておきます。
彼等が三年を始めとする全学年にウワサを流してくれたせいか、
それからの授業では疑う生徒はほぼ皆無となりました。

やはり始めの一歩は肝心ですね。

まさか生徒と決闘なんて出来ませんしね。

で、再びルイズのクラスです。

よつやくキャラと名前が分るクラスとなりました。

前回とは違い、最初からデブキモオタの外観は消したので、
以前程、嫌われる事もなく、概ね好意的に感じられますね。
特に敵意が無いのは楽です。

まあ、たまにはバカな生徒も出ますが、今なら容易にあしらう事も
可能です。

たまに不意打ちでカツタートルネードとかファイヤーボールをブッ
放すアホもいますよ。

でも全部、叩き返しております。ハイ。

彼等も自分の魔法がいかに危険な存在なのか理解出来たみたいで、
二度とバカしなくなります。

やはり子供の躾けは大切ですね

アキバ先生は私の授業光景を教室の片隅で見学し、ノートに色々と
書き溜めています。

参考になれば良いのですが。

彼には後任をお願いしないといけません。

恐らくアルビオン戦までには・・・。

授業が終わった時の事です。

薔薇男こと、ギーシュ君が自分の側に駆け寄つて来たのです。
何でしょうね？

「ミスター・タロウ・ヤマダ先生、お願ひがあつて来ました。」

「ギーシュ・君でしたよね？」

タロウ先生で良いですよ。どう言つ質問でしょ。

スリーサイズは秘密ですが・・・。」

「えつ、それは残念・・・って違う。

誰が男性のスリーサイズを聞きたいモノ好きが居ますか・・・。」

「オヤオヤ、残念ですね。

では・・・。」

「お待ち下さい。タロウ先生。

先日対峙したゴーレムの事です。」

「フム・・・、あのジンガーンの事ですね。」
やはり漢の浪漫はスーパー・ロボット、そして武器ですよ。

「アレの事ですね。アレは私の「この世界」ではオリジナルで考えた、
マンガー^{オト}とあります。本当は学院の建物位の大きさが基準なの
ですが、
決闘用に作ったため、人間サイズで作りました。
それがナニか?」

「あ、アレで手抜きだったのですか?
そして建物サイズとは・・・。」

「そのままの意味ですよ。

アレが本当に戦闘体系となる場合は巨大ゴーレムとして、相手を粉砕してしまいます。

まあこの世界では無敵ゴーレムとなる自信はありますよ。」

「凄い・・・、強そう・・・カッコイイ・・・痺れます。」

「ギー・シユ君、理解してくれましたか?」

「ええ、モチロンです。それに比較してボクのワルキューレの弱かつた事。

もっと鍛えるべきでした。

天狗になる前で良かつたです。先生。」

「キミはまだ若いんだ。鍛えて、想像力を付け、魔力を強めれば・・・。

何時かは世界がキミを振り向くだろう。努力と研磨ですよ。若者は。」

「分りました。先生。努力して見ます。」

「ウンウン。素直な若者は好ましいですよ。」

「何時か時間の取れる時で結構です。個別指導をお願い出来ませんか?」

「個別ですか・・・まあ考えておきます。」

私も新任なので色々と今は忙しいのですよ。

もし鍛える気があるなら、放課後は自分の作れる最強のゴーレムを作り、

対峙させて戦わせて見たらどうです?

魔力切れには注意してくださいよ。倒れたら大変です。」

「・・・ありがたい貴重な話をありがとうございます。

では、今日から早速、ヴェストリの広場で訓練して見ます。

「ウンウン。頑張ってください。自分も時間のある時は見学に行きますか?」

「楽しみに待っています。」

ギーシュはそのままと、教壇から去り自分の机にと帰つて行つた。
彼も好きなキャラですから、時間見て色々とノリノリニューションを取り、

仲良くしたいですね。

この世界の彼もビンボなのでしょうか・・。

だつたらまたバイトで色々と活躍して貰いましょう。
教室を辞して、マチルダの待つ職員室へと帰ります。
最近の昼ごはんは彼女とシエスタと共に学院の広場で摂る事が多い
のです。

ああ、シエスタですが正式に雇用する事にしました。

お給料は学院メイドの数倍。

最も形式上の事ですけどね。

オスマンから預かった支度金の殆どを彼女に渡し、自由に使わせて
おります。

やりくりの得意な彼女に家の事は任せたら食生活は完璧ですね。

昼餉を終え、しばらくボケつとしてたいので、彼女達には退散して
貰いました。

こうやって一人で居るのも大切な時間ですからね。

この世界に再び拉致されて、魔法のチートと言ひフレゼンツを貰つ

た自分が、

やはり地球世界は恋しいです。

親しい人は殆ど居ませんでしたけどね。
でも24H何時でも開いてるコンビニ。
ヲタの聖地、アキバ。

夏と冬に並んだコミケ会場。

溢れる位販売されたヲタグッズやDVD。

嗚呼、この世界に無いモノがすべてありましたから・・・
無ければ作ればいいジャンなのですが、一人の力は限界があります。
やはり同士を募るべきですね・・・。

アキバ先生は既に同士ですが、機密はまだ明かせません。
機密を知るのはマチルダとシエスタのみ。

彼女達が付いて来てくれるでしょうか・・・。

自分の趣味に・・・。

悩んでもヲタの道は開けません。

まずは一番信頼出来る彼女達にすべてを打ち明けるべきです。
ルイズは、そろそろ何とかしておかないと、お姫様の暴走に巻き込
まれてしまいます。

アレが絡むとこの国は荒れてしましますからね。
さて・・・。

今宵は彼女達に協力を依頼しますか。

聞いてくれるとは思いますが、拒否られたら・・・。
泣くしかないっス。

ただ今授業中（後書き）

ようやくヲタの道を切り開く決意をしたタロウです。
この世界にヲタグッズが溢れるか。
次回の更新をお待ちください。

咲田（前書き）

マチルダさん達に会えます。

告白

タロウです。

自分はこの世界に来て最初の告白にドキがムネムネして・・・

間違いました。

胸がドキドキです。

マチルダとシエスタに自分の胸のうちを知りし、付いて来てくれるか確かめるためです。

自分の我慢ですが、やはりヲタとは離れたくありません。
異界と言えども自分の趣味は殺したくありません。

ビバ、ヲタクですよ。やはり。

現世ではそろそろヲタクも立派な産業の一つとして、
認知されつつありますが、この世界では未知の分野。
ましてや彼女達は女性です。

ですが、彼女達なら受け入れてくれる。
そう信じたいです。

はあ・・ヘタレなのでマヂな告白は死ぬより辛いっス。
一度は死にましたけどね。（笑い）

さて、シエスタがお茶の準備をしてくれたので、彼女にも着席を薦め、
大切な話があるので聞いて欲しいと頼みました。

彼女達も怪訝な顔してましたが、よほどの事と思つたのでしょうか。

黙つて席に着き、話を聞いてくれる様です。

「マチルダ、シェスタ。

これから話す事は女性には受け入れられない話かも知れない。
もし自分が嫌いになるならそれでも構わない。
まずは話を聞いてくれないか?」

彼女達は紅茶をすすり、何でも話してくれと言います。
では、話すとしますか・・。

「自分がこの世界は一度田だとは既に信じてくれてますよね?」

「ええ、モチロンです。」

「存じ上げていますわ。」

「で、自分にはある趣味があります。

女性には不愉快に思う趣味かも知れません。

ですが、この趣味を無くしたら自分では無くなる位、自分には大切な趣味なのです。

当然、この世界には無い趣味です。

受け入れてくれとは言いません。

ただ自分の人生の一つとして納得して欲しいのです。

聞いてくれますか?マチルダ、シェスタ。」

「モチロンです。私は貴方の僕です。」

「世界が敵に回つても私は『主人様のメイドです。』」

「二人とも・・・

ありがとう。

さて、マチルダ。今から見せるモノを見ても驚かないで欲しい。」

そう言ひと自分が日本で作り上げたアノ・・

ティファニアフュギアを彼女に見せたのです。

マチルダは驚き、その人形を繁々と見つめます。

そして・・・。

「コレってタロウ様が作ったのですか?」

「その通りです。

異界の母国、日本で作ったテファのフュギアと言ひ飾つて愛でる人形です。」

彼女はそのフュギアをマヂマヂと見て、彼女の知るテファに瓜二つなのを確認してた。

そして・・・。

「タロウ様が異界から来たと言うのは真実なのでしょうね。このテファの人形は本当に私の妹、ティファニアと全く同一です。ここまで正確な人形はこの世界には絶対にありません。」

「理解してくれてありがとう。マチルダ。

そしてシエスタ、オレはある性癖の女性を妄想するのが大好きな人間です。

異界に住んでた時は、自宅警備員と称して、自宅でパソコンや人形作りで遊んで暮らしてた、ダメ人間でした。

「この世界ではンナ事できませんけどね。」

「タロウ様は働き者ですね。」

「ん、今はね。

でも日本じゃホントにデブでキモヲタのマダオでした。

こっちに来なかつたら死ぬまで引き籠もつて生活してたと思います。

」

「や、そんな勿体無い事を・・・。

この世界にタロウ様を呼んだ神に感謝しますわ。」

「ええ、私もそう思います。タロウ様、私達が付いています。

どんな性癖でも私達は受け入れます。

人形を作るモデルになれと言われるなら、どんな嫌らしい格好でも引き受けます。

どうか引き籠もらず、この世界で戦ってください。」

「私もですわ。タロウ様。

裸エプロンでも荒縄縛りでも何でも受け入れます。

私のすべてはタロウ様のモノです。

バツチコイですわ 」

一人の告白にオレは・・オレハ・・・・。

感動

したじおおおおおお・・・・。

彼女達はやはり前世同様、オレを受け入れてくれた。
もう世界を敵に回そうが、この一人が居たら怖いものはナシ。
我が生涯に悔いナシ・・。まだ死んでねーぞ・・。

んで、今後の事も色々と話し合つ事にした。

今から色んな事件がこの世界で起きる。

そして確実にオラも関わる事になる。

まだ確定では無いが、その過程で色んな妻 ズが増えてしまつが、それは許してくれ。

前世でもこの二人がオラの妻 ズの筆頭妻だったと告げると彼女達は大喜びしてくれた。

そして、どんなだけ女が増えても私達を捨てないなら、いくらでもバツチコイ。

何だつたら妻 ズの教育も引き受けたる・・とか・・。

やはりこの二人を引き入れたのは正解でしたね。

信じてくれる。

そして共に歩いてくれる。

こう言う奥様は本当にナーが起きても大切にするべきですよ。

DVして喜んでるアンタ。

奥様はモノではありません。

生涯を支えあう大切な番いですよ。

まあ本人の自由ですけどね。。

マチルダにはシエスタと孤児の件も相談しといた。

これから起きる事件の過程と同時進行で、この地の権利を国から貰つたる。

その時に改めて、この家の近くに孤児院を設立する。

そここの院長をマチルダに頼みたい。

そして孤児院と併設して、ヲタシヨップも作る。

彼等の日々の糧をそこで得れる様にしたい。

そう言うと、単に生活を見るだけで無く、将来の事も考えて下さるとは・・と、

彼女も大賛成です。

テファはコツチに来る時に耳を作り変えて普通の顔に出きるから安

心してネ、と告げておいた。

シェスタも黙つて聞き逃してくれたし・・。

色々と話し込んでメシを作るの忘れたとシェスタが言つので、久しぶりにクリエイト魔法で、『ニー』のワンチをクリエイト。

彼女達も大喜びで食つてくれました。

そしてその夜は更に激しくゲフンゲフンな夜になつたのは言つまで
もありません。

翌朝、アクア様のダイブで体調も完璧にして貰いましたけど・・。
しかし良かつたああ。

コレでヨタショップの道も少し前進したじゅああ。

告白（後書き）

マチルダとシエスタとの密談の一日でした。

回士募集中（前書き）

いよいよタロウのタタ回士を募る暗躍が始まります。

タロウです。

マチルダとシエスタが受け入れてくれた事で、いよいよワタシショップ、前進・・・。

とは行きません。エエ。

何せこの世界の連中の性癖と趣味が不明です。
いきなり変態ショップ出して誰も購入してくれなくて倒産なんて・・・。

悲惨です。

ですので、まずは健全なお店から出店するべきです。
彼女達もそれが安全と言いました。

ん、では、またあの手で・・・。

ま、お店はアルビオン戦が終わるまでは封印しちゃいます。
地下室に趣味のフュギアは作り貯めてはおきますけどね。
作る時間あるの?って、そりゃ簡単ではありませんが、人間、成せ
ばなる。です。

寝る時間を削つても彼女達を作る趣味は欠かせません。

最新のフュギアは神ネットで取り入れてPOして詳細を「」ペーし
てあります。

ハルケギニアでも最先端のヲタは自分と断言出来ますよん。
さて・・・。

自分と同じ匂いを持つ人間ですが、中々分りませんつ。
フュギアを見せびらかす訳にも行きませんしね。
でもね・・・。

やはりこの世界は前世の輪廻ですよ。
だつて・・・。

「帰られるをお待ちしておりました。
我が主、タロウ様……。」

ワルドが涙を貯めてオラの前に鎮座してたのです。
もうビックラですよ。

何でもオラがコッチに召還された頃、突然前世のワルドとか名乗る
魂と

合体し、前世の幼女趣味が脳内暴走。

そして学院にオラが居ると知るや、魔法衛視隊を退職。

身体一つでココに来たとか・・・。

アンタ、まだオラも仕事安定してないのに、辞めてどうすんの??

「大丈夫です。

自分は例え草の根をすすつて生きてでも、タロウ様の負担はかけません。」

いや、思いつきり負担かけるじやん。

オラ達がキャッキャッウフフな生活してて、ワルドさんにて食同様
の生活を

強いるなんてオニでは無い自分には出来ません。

ハア・・、二人に相談しますか・・・。

もちろん彼女達は受け入れてくれます。

貴方の部下なら私達の同士と・・・。

ご飯位はキチンと私が作って差し上げますとシエスタが言つと、ワ
ルドは男泣き。

そして部屋はさすがに一緒にイヤなので、マチルダが庭の片隅に簡
易な自宅をワルド専用に
作つてあげたのです。

ワルドは奥方一人に・・・感謝しますつて。

はあ、しかしワルドも帰つてたか・・・。

まあ彼には前世でも色々と世話になつたしね。

新作のフュギアをあげると、早速自宅の本尊にしますと、棚に飾つて拝んでいました。

時代は変わつてもヤツは変わつませんね。

さて、これで前世で自分を支えてくれた人はほぼ固めました。後は実績作りです。

何と言いましても自分は未だに得体の知れぬ異国のメイジですから。人形作つて楽しめる日々が来るまでの道のりはまだまだ先ですな。んで、学院の教師を続けるべ・・と、思い毎日を過ごしていました。ほしたらさ、やっぱり絡んで来るので。

クーデレちゃんのタバサたんが・・。

「貴方にお願いがあるの・・・。」

生徒ではありますが、質問も無く名前も本名も（もちろん存じてますよ。）知らぬ、

異国の留学生。

タバサ・・。

おそらくオカンを治して欲しいとか言つのでしじうね。

そしたらさ。

やつぱしこの世界、自分の斜め上を走つてたみたいですね。

だつて・・・。

「貴方の僕にして欲しいの・・。」

「ハツ？？？ミス・タバサ。もう一度お願ひします。」

「貴方との前世の関わりを思い出したの。
お母様の事はいずれ何とかなる。

だけどモンモランシーやキュルケに貴方を取られる前に貴方の僕になりたいの。
正直、仇などは、もうどうでも良いの。

私の願いはただ一つ・・・。」「

「ゴクリ・・・。」

「前世で最終回まで読めなかつたヤヨイ小説の続きが読みたい。
そして貴方の脳内にある小説をすべてこの世界に出して欲しいの。
私にはこの貧相な身体しか無い。

こんな身体で良かつたら代償に使っても構わない。」

いや・・・。タバサさん。私は変態ですがガチロリでは無いのです
が・・・。

「これから戦争が始まる事も思い出している。
私では足手まといとなるかも知れない。
だけど、貴方の背後を守れる位の強さは持つている。
お願い、私を貴方の僕に加えて・・・。」「

そう言えばこの方、前世でヤヨイにハマつっていましたからね・・・。
しかしこの方、前回は妻ズには加えていませんぞ。
どうしてこうなった・・・。

「タロウ様、私達も貴方の小説に狂つてた人間です。
今、彼女の告白を聞きすべてを思い出しました。」

あの脳に響く甘美な小説がこの世界に伝わっていないのは、おそらくハルケギニアが

一度は滅びたせいかも知れません。」

何ですとおおお。

一度滅びたのですか？？

私のラ・フォンティーヌ領も・・・・。

「この地は一度滅びたってホンマでつか？」

皆様・・・」

「どうやら本当らしいです。

私も母の遺言を調べるためにトリステインのアカデミーで調査した
事があります。

その中に、この大陸が一度浮き上がり人民すべてが壊滅。
その後新しい民がこの地に生まれついたなり・・・と言う文献が残さ
れてました。」

アクア様、ホンマですか？

（ウム、タロウ亡き後、この地の精霊すべてが引き籠もってしまい、
すべての精霊が力を放棄してしまったのだ。

その後、この地に住む単なるモノはすべて死に絶えた。

私はそう記憶している。）

あれま・・・。

オラの死去ですべての精霊様が引き籠もられたのですか・・・。
んじやこの地を生き延びさせるにはオラは死ねない・・・つづ一事
ですか？

（その通りだ。お前の存在はもはや単なるモノとは違うのだ。
さあ、我もあるお前が書いてた小説とか言つ甘美な読み物を欲して
る。

早く書くのだ。タロウよ・・・。）

精靈様も読者だったのですね。

しかし、自分の死去がハルケギニアの滅亡に繋がつてたとは・・・。
オラはどうしたらエエの？

「死ななければ良いだけの事よ。

我や他の精靈も今度はタロウを逝かせぬと、気合を入れてある。
頑張つてこの地の神となるのだ。

タロウ、いやお父様よ・・・。）

「お父様つて・・・。」

（もはやお前がこの地の神となるのは我等精靈の間では確定してお
る。

頑張つて我等、すべての精靈を仕えさせて欲しい。

我が父となるタロウよ。）

「タロウ様、やはり貴方はタダモノでは無かつたのですね。
まさかこの地の運命にも関わる存在だったとは・・・。」

「タロウ様、キュルケやモンモランシーに奪われる前に私を差し出
す。

私の主となつて欲しい。」

もうメチヤクチャです。

他の精靈様が乱入しなかつたのは幸いでしたが、一度彼等にも挨拶

しておくべきですね。

それにしてもヤヨイか・・。

ネタはいくらでもありますからね。

書くのは楽ですが、まずは地盤を固めてからね。

タバサさん、もう少しお待ちを。

同士募集中（後書き）

何かタロウの運命がハルケギニアの運命にも関わってたらしいです。
驚愕の運命を聞いたタロウはどうするのか・・。
次回を待て。

キュルケ（前書き）

今日は微熱さんのターンです。

キュルケ

私の名はキュルケ・アウグスタ・フレーテリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

人は私の事を微熱のキュルケと呼ぶわ。

ゼロのルイズとは違う、ボンキュッポンのナイスバディの女性よ
トライニアグルのメイジだし、全てで彼女に勝つてるわ。
でもね・・。

一つだけどうしても勝てない事が出来たの・・。
それは・・・。

「きや ペソペソちゃん、カワイイ 」

そう、ルイズの使い魔、ペソペソ。

悔しいけど見てるだけで癒される使い魔なんて初めてよ。

何でもルイズに召還されたタロウ先生が代わりの使い魔として『え
たつて言うじゃ無い。

はあ、いいわね・・。

そして何故か最近はタバサも私から離れてタロウ先生の所に入り浸
つているのよ。

周囲に色んなオトコは居るけど、最近は微熱も感じないのよ。
どこかに私の微熱を感じさせてくれる人は居ないのかしらね。
最近は本当に同学年の男子をからかっても楽しく無いのよね。
ルイズもゼロとか罵倒されてもペソペソ居るからいいモンだし・・。
ヒマなのでタバサを少しだけよ。
少しだけストーカーして見たの。

そしたらタロウ先生の自宅に毎日の様に通つて居るのよ。

見た事の無いメイジの男性も居るし、メイドさんに元秘書のロングビルさんも。

確かタロウ先生って最近、この国に来たばかりよね。

どうしてあんなに人が集まるの??

凄いメイジだつて事は分かつてるけど、それだけじゃ無い??

それから私は彼もついでにストーカー始めたの。

授業? どうでも良いわ。

セクハラ校長の居る学院ですもの。

イザと言つ時はアレにお尻でも触らせたら何とかなるわよ。

そしたらさ、タバサつたら先生のトコで本ばっかり見てるのよ。
ええ、確かに本だわ。

でも見た事の無い表紙の本ね · · ·

華やかな絵が描いてあって、表装も見た事無い感じだし · · ·

不振に思つて、タバサが木陰で読んでる本を一冊だけ勝手に読んで
見たのよ。

そしたらさ · · ·

ナニ? ? ? ハレ! ! !

ゴーレムを操る男の子が綺麗な男の子と · · · · ·
変な事してる内容なのよ。

タバサつたら、何時の間にこんな本を · · ·

でも彼女は怒つて本を奪い返すと、部屋に入つて引き籠もつてしま
つたのよ。

あんな本つて今まで絶対に見た事無かったわよ。
もしかしてタロウ先生の家にある本かしら · · ·

「うと思つたら行動するのがショルプストー家の信条よ。」

もう黙つていられないわ。

私はタロウ先生の自宅を訪ねる事にしたの。

用件は・・。

勉強を教わるでいいわね。名田上は。

学院のすぐ近くに建てられたタロウ御殿は、先生が一人で建てたとは思えない位、

ガツチリした作りだわ。

あの素敵なメイジの方の家も敷地内にあるみたい。

それにしても綺麗な池ね・・・。

「こんにちわ 学院の生徒のキルケと言います。
タロウ先生はいらっしゃいますか？」

「はーい、今開けますね 」

学院で働いてたメイドさんだわ。この方。
名前は知らないけど・・。

「えっと、ご主人様に御用でしようか？」

「ハイ。少し魔法の事でお聞きしたい事がありまして。」

「もうすぐ帰つて来ると思いますから、中でお待ち頂けますか？」

ヨツシヤ 中に入ればコツチのモノよ。
きっとあの本の秘密もココにあるわ。
あ、あんなイヤラシイ本なんて・・。
私も読んで見たいのよおお。

でも初めての家で家搜しなんて出来ないわ。

どうしようつ・・・。

そしたらタロウ先生がお帰りになられたの。

女は度胸よ。

直球で勝負だわ。

「タロウ先生、こんにちわ。」

「おや、貴女は・・・。キュルケさんでは無かつたですか?」

「ハイ、キュルケ・アウグスタ・フレーテリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。

長いのでキュルケで結構ですわ。」

「そうですが、ではキュルケさん、どう言つて用件でしょ。出される事なら、相談に乘りますが。」

「あのおお、タロウ先生つてタバサに変な本を貸していません?」

ギクッ・・・。もう見られたのか。

あれだけ管理には注意しようとタバサには言つてたのに・・。

「え、まあ・・どんな本かは知りませんが・・。」

ウソだわね。絶対にクロよ。この人。

知らんぷりしてやがるわ。

絶対にカモにしたる。・。

「先生、最近タバサがこの家に良く通っているのを見かけていましたの。

そしたらアノ本ですよ。

若い男性同士が熱い抱擁を交わすいかがわしい本……。
でもね。先生。

私も少しばかり興味あります。ああ言う本に。

もし良かつたら私にも読ませて頂けないかな……と。」

うわ　　！　不味い。

まだ発売前だし、店も無いのに出せる訳が無いっしょ。
どうするべ。

そしたら一度タイミング良くタバサさんが来賓されたのです。

「…………キュルケ。どうしてタロウ先生の家に来てるの？」

「あら、タバサ。私も貴女が読んでる本を読みたくて来たのよ。」

もう暴露したるもんね。あんな楽しそうな本を一人占めなんて許さ
ないわ

「…………アレはまだこの国では売り出していない先生が作った本。
私は彼に読後感想を伝えてるの。コレも仕事……」

「アラ？ だつたら私も感想を言つわ。

ね、先生。私だつたら熱い話も言えますわ。だから……。」

「分りました。キュルケさん。

ただし、一つだけ約束してください。

今から渡す本は将来、この国で売り出す予定です。

ですので、タバサさんと貴女以外には絶対に読ませない。タバサさんも読む場合は必ず自室かココだけで読む事。もし他に知られたら、もう貴女にも読ませません。」

「・・・先生、それは困る。

もう絶対に外では読まない。誰にも知られない様にする。この本が無いと私は生きて逝けない。

カホル君とシンチ君の恋の話は、私の心のオアシス。」

タバサは涙目でタロウに訴えてる。

どんだけ真剣に読みたいの？？

「うわっ、モロに言つてますわ。タバサさん。わ、分りました。とにかく秘密にしててくださいよ。まだ初期ロットしか無いんですから。

今後はタバサさんとキュルケさんに感想をお願いします。」

タロウ先生から『えられた「珍世紀ウェヴァンゲリホン」は本当に衝撃的な話だつた。

お父様に捨てられたシンチ君がゴーレムに無理やり乗せられ、

戦いの中で知り合つた彼との悲しい恋と別れ。

もうコレを読んだらいーデルヴァイの勇者なんて陳腐で読めなくななるわ。

タバサは彼等の恋愛の話に真剣に読んで、読後感想文をタロウ様に渡してました。

え？私のタロウ先生の呼び方が変わってるって？

当然でしょ。

こんな衝撃的なストーリーを作られる方を先生如きで済ませられる訳がありませんわ。

ああ、シンチ君、私が貴方の側に居たら、絶対に幸せに出れるの。
・。

ハイ、キュルケさんもコッチ側に来てしました。

彼女達以外には発売出される体制が整うまでは絶対に封印しどかない
とね。

はあ、次のシリーズも考えておくべきか。

「ああ、力ホル様ああああ・・・。」

キュルケ（後書き）

この話はフィクションです。
ええ、すべてフィクションです。

本年最後の更新となります、皆様、良いお年を。

タゴサク

お姫様來訪（前書き）

いよいよゼロ魔最初の山場となるお姫様が來訪されます。

ふんふんふ ん ふんふふ ん

私の名前はアンリエッタ・ド・トリステイン。
名前が示す通り、トリステイン王国の王女。
人は私をアホ姫とか幼女姫とか言つてますが、そんな事はもうビリ
でも良いのです。

アノ方がこの世界に帰られたのです。

嗚呼、あの麗しき物語の続きが読める世界になるとは・・・。
私は情報を察知すると同時にの方の周囲を探らせました。
すると、既に女狐が多数アノ方の下に潜り込んでいました。
王女と言う枷が無かつたら私もあの中に入り込むのに。
相変わらず貪り王國の王女と言つ、情けない配置に居る私です。

もうお氣づきとりますが、私は一度目のアンリエッタです。
あの世界では私はアルビオンの女王となりました。

しかし・・・。

私はアレには心底呆れたのです。

もうアレでいいですわ。ウエールズは・・・

私との婚姻後、アレはルイズの友人だった
ギーシュとか言つ若者が可愛く思える程の浮氣ものになつたのです。
アレは・・・。

アノ方みたいに才能のある人なら多少の浮氣も許せます。
ですが、能無しの癖にカツコばかり付けるアレには呆れました。
この世界でも色々と言い寄られていますが、もう騙されません。
私はアホ姫の仮面を被りつつ、アノ方がお帰りになるのをひたすら
待ち続けました。

水の精霊様もアノ方がこの世界の窮地を救う神となられるのを切望されてるとか。

あの素晴らしい物語や数々のオモチャ。
そして世界を救つてくださる慈悲深い御心。

私はの方に仕えとうございます。

ソのためなら、ンナ国、潰しても一向に構いません。
ウチのオカーンはこの世界でも引き籠もりしておりますしね。

「姫様、」機嫌宜しいですね？」

「アラ？当然よ。マザリー二枢機卿。

この世界の救世主が帰つて来たのですもの。」

「そうですね・・・私も前世ではアノ方に色々と助けて頂きました。
この世界も救つて頂けると確信はしています。」

「あの方のためなら、この貧乏国家など潰しても構いません。
ですが、それでは民が溜まりませんので・・・
何とかあの方の慈悲をお願いするしかありませんね。」

「その通りです。

あの方が存命してゐる間には浮いてた戦艦ムサシもあの方が亡くなられ
て、
すぐにはラグドリアン湖の奥深く沈んでしまいました。
アレがあの世界の崩壊の始まりでした。」

「もう終わった事です。

私達はあの方におすがりして、この世界の窮地と未来を救つて頂く
しかありません。

そのためなら・・・。

この私の些細な肉体を捧げる事も厭いませんわ

ぱつ

「前世では姫様もアルビオンでたいそう苦労されましたからね。」

「ええ、もう顔だけの能無しオトコはマジックです。
オトコは甲斐性と懐の深さと知識です。」

パツカパツカと言つ馬車を引く馬の蹄の中でもザリーニとアン
リエッタは、

物騒な話し合いを続けてた。

そう・・彼女達も・・・。

帰つて来た人だつたのだ。

しかも彼女は水の精靈に扱り、すべての事情も察知してた。
今度こそは間違わぬ。

すべての精靈が慕うアノ方こそが、この世界の王なのだ。
マザリーニと私を乗せた馬車は一路、アノ方の居る居宅へと進んで
いた。

「諸君、授業は中止ですぞ。」

授業中に突然乱入して来たフサフサ頭のコルベール先生の声で、自
分の授業は

中断されてしまった。

もうそろそろイベントの始まる時期か・・・。

原作のイベントがなくなつてるので、時期が曖昧となつてしまつて

たが、

多分、アノ姫様が来るのだろう。

そう考えてたら、オスマンから至急、自宅に帰つてくれ。事情は帰れば分るとの事・・・。

怪訝に思い、オラは自宅に帰る事にしました。

自宅に帰ると、タバサとキュルケが本を必死で読み、シエスタがお茶を入れて窓いであります。

庭ではワルドが草刈を。

マチルダは自分の背後に立ち、色々と手助けをしてくれています。さて、帰宅しましたが・・・。

すると・・・。

「タロウ様、大変です。お城から姫がコチラに来られています。」

「ふえっ？？姫様が・・・。」

「ハイ。もう来られました・・・。」

すると、会いたくも無かつたあのアホ姫がマザリーーと共にウチの玄関から入つて來たのです。

護衛は・・・いません。

二人だけです。

「タロウ様、お久しぶりでした・・・。」

彼女はそう言つと自分の胸に飛び込んで来られたのです。

エッと・・・。

何でこうなつてゐるのですか？？？

マザリー「わん、二三回しないで引き剥がしてください。

「あのおお、どうして姫様が……。」

「まつ、私の事もお忘れになつたのですか？（怒り）」

「だつて自分と姫様は初対面ですよ。（少なくともこの世界では。）

「

「じゃあ暴露しましようか。

私、こことアンリエッタとマザリーはアノ世界を経験した人間です。つまり……。」

（ヤツ等も帰つて來た單なるモノと言つ事だ。父上よ。）

「精靈様、まだ父上にはなつて無いハズですが。」

（些細な事よ。父上が父上となるのは既に確定してある。

さあ、ヤツから事情を聞け。そしてこの国を……。

そしてこの世界を父上のモノにして、この地に君臨するのだ。）

凄い事を言つてますが、アクアさん……。

それにもアンリエッタとマザリーが帰つて來た人ですと。

オラはこの方には指一本触れていませんでしたぜ……。

どうしてこうなつた……。

そこでオラは気づいた。。

この場に居る人間で事情を知らぬ人間が居るのを……。

チラリと後ろを見ると……。

キュルケがフリーズしてたのです。
ヤバッ・。

（父上よ、案するな。あの単なるモノには我が事情を流し込んでおく。）

すべては些細な事よ。）

流し込んでおくつて、アクアさん・、ビツするの？

そしたらキュルケの額の辺りから光が発生。
見る見るうちにキュルケは目を回し、テーブルに突っ伏してしまいました。

どったの？

（ヤツの脳に直接、前世のヤツの事を流し込んだだけよ。
数刻程度気絶したら事情を理解出来るハズ。
さあ、父上よ。アレから事情を聞くのだ。）

キュルケをタバサとマチルダにベッドに運んで貰い、俺たちはアンリエッタから

事情を聞く事にした。

だが、内容はかなり衝撃的な内容だった。

まず、アンリエッタが嫁いだウエルズが婚姻後、家庭を顧みぬナンパ男になってしまった。

そしてアンリエッタの生涯は不幸の一文字であつた事。

今生でもウエルズから言い寄られてるが、もうマッピラ御免。
そしてオレ達の家庭が凄く眩しくて羨ましかつたと・・・。

マザリーにはラグドリアン湖には今でもムサシが沈んでる。
コレはオレが復帰出来るまで封印してあるとの事。

その他にも色々と衝撃的内容があり、さすがにオレも頭がオーバーヒートしてしまった。

だがフリーズもしていられない。

ヒートした頭はアクア様のダイブ通過でクールにして貰つたが、考えが纏まらない。

要約すると・・。

アンリエッタも妻ズに加える。

そしてこの国はすべて任せてもOK。

権威が無いと言つならすべての精霊様が国民の前に姿を見せても構わぬとか・・。

何か凄い事になっちゃった。

そしてアルビオンのレコンキスタだが、やはりこの世界でも暴れる。

精霊様が協力したるからチャツチャツと殺つてしまふって事らしいです。

レコンキスタ殲滅の英雄として、オレを国のトップに迎えたら完璧じゃネ?との事。

イヤだな・・。

オラはノンビリとラタショップを作れたらそれで良いのに・・。

考えがまとまんねえ。

ふんが

!!

お姫様來訪（後書き）

皆様、新年おめでとうございます。
アンリエッタの告白編はいかがだったでしょうか。
彼女の暴走はまだ続きます。

お姫様來訪 2（前書き）

お姫様パ一ツクは続きます。

タロウです。

アンリエッタの告白で頭が完全にブツ飛んでいます。
どうしたら良いのでしょ。

まさか国のトップまでが帰つて居たとは・・・。
しかも国をあげても良い。今は危険な誘惑ですね・・・。
まだ時期が早すぎです。

それよりも、この土地の権利を頂き、フュギィアとか本を出すのが
先ですよ。

あ、姫様。

その本はまだ発売前ですが・・・。

はあ、もつ読んでいるのですね・・・。

「嗚呼、力ホル様の物語がこうなつてたとは・・・。
シンチ君、キミだけは幸せにして見せるつて・・・。
何て素晴らしいセリフでしょ」

姫様は珍世紀ウェヴァンゲリホンに熱中されておりました。
カビの生えたイーデルヴァイの物語の何百倍もの内容とは自負して
ますがね。

この世界で顛末を知るのは自分だけですし。

さて、どうしましょ・・・。

いくらトップが騒いでも、自分は異国から来たばかりのメイジ。
権威もナニもありません。

単に魔法が出るだけです。ハイ。

好きに生きるとは言いましたが、ムチャクチャはするつもつはあり

ません。

元々ヘタレの自宅警備員です。自分は。

う ん・・・。

少し頭を冷やしますか。

皆さんにしばし退席するからと告げ、大空にフライです。逃避です。
魔力が多いってこう言う時は便利ですね。

一時間は飛んでたでしょうか。

大分頭も冷静になりましたので、自宅に帰りますと・・・。

「ダーリン ！」

突然キュルケさんに抱きつかれたてしまったのです。
どうしたの？？

「ゴメンナサイね。ダーリンの事を思い出せなくて。
精霊様に記憶を戻してもらって前世の事も完璧に思い出したわ。
さあ、ダーリン。ベッドに逝きましょ 」

チョッ、キュルケさん。どうしたのですか。
人のベルトを外さないでください。

止めて

すると、彼女はボコンと言づ音と共に床にヘタリこんでしまいました。

タバサさんが杖で殴つて下さったのです。
GJですよ。タバサさん。

「・・・・キュルケ、まだ早い。

私達は学生。せめて先生が学院を退職するまでは待つべや。」

タバサさん、何か怖い事を仰っていますが・・・。

キュルケさんもすぐに復活されました。

「そうね。タバサ。嗚呼、早く先生が手柄を立てて國に奉公できな
いかしら。

そしたら私は実家からも縁を切つて貰つて、身体一つでタロウ様に
嫁げるのに。」

「お待ちなさい。

タロウ様は私と婚姻して頂き、トリスティン王國の王となつて貰う
のですよ。」

もうメチャクチャです。

さすがにシエスタさんやマチルダさんは・・・。

アララ・・・。

顔に青筋が出てますね。
相当のお怒りみたいで・・・。

ハア。

度胸を決めますか・・・。

「皆さん、静かにしてください。これから今後の事を話しますので。

」

オラがそう言つと、騒いでた彼女達も静かにしてくれた。

はあ、心臓に悪いわ・・・。

「まず、自分の今後です。精霊様やアンリエッタ様の言われる事は理解出来ました。

ですが、今すぐとは行きません。

自分はまだこの世界では何の実績も無い異国のメイジに過ぎません。

」

「そんな事は無いです。既にこんなお話も作ってるではありませんか。」

「静かに！…まだ話は終わっておりません。」

彼女達も怒声を浴びせてようやく黙ってくれました。

あまり怒鳴りたくないのですよ。

オラはヘタレですか？」

「姫様、まず確認したいのですが、既にレコンキスタの攻撃は始まつているのですね。」

「は、ハイ。その通りです。

アルビオンからは救援を求める手紙とか来るのですが、アレとは関わりたく無いので、シカトしています。」

ウエールズさん、アンタ、相当嫌われてるね。
アレだよ。シクシク・・・。

「ふんじやオラに依頼してください。」

レコンを放置してたら次はこの国がターゲットです。

覚えてるでしょ？」

「やつですね。確かに前世でもトリストeinが次の目標でした。」

「幸いにも魔法と魔力は のチートを授かっています。
これならどんなムチャでも出来ます。
で、そのレコン潰したら、この土地一帯をオラに授けてください。」

「アラ～」の辺鄙な土地だけとは言わず、トリストein全土でも結構ですわ 「

「要りません。この辺りだけで結構です。
ココに前世同様のショップと書籍店と飲み屋を作ります。
それだけでオラは充分です。」

「まあ謙虚です事。では、レコン殲滅後にこの辺り一帯すべてをタ
ロウ様に献上致します。
私も色んなお買い物が楽しみです 」

「はあ・・・。その時はヨロシクお願ひします。
ついでに孤児院も作りますよ。院長はマチルダさんです。」

「分りましたわ。その様に手続き済ませておきます。」

「そう言えば今回はルイズのココには行かないのですか？」

「アラ、だつてルイズの虚無は無くすのでしょうか？
だったら無謀なお願いはしませんですわ。
アレには手紙も出していませんし・・・。」

「アレ……ですか……。

ハア……分りました。

では王女様と枢機卿の依頼でレコン壊滅に向つて書ひ事で宜しいですね。」

「H-H。タロウ様ならチャツチャツと殲滅してしまつでしょ。ヨロシクお願ひしますね」

何かお使いにでも出す感じですな。

ま、潰しておかないとアレは面倒な事になります。

あ、そう言えば……。

「水の精霊様。

今回はアンドバリの指輪は奪われたのですか?」

「案ずる事は無い。父上よ。

ヤツ等に渡つたのはれっふりかだ。

一応、アンドバリの指輪みたいな事は出るが、父上が戦場に出た瞬間に壊れる設定だ。

回収する必要も無い。」

「……そうですか。では消しても構いませんね。」

「その通りです。父上。」

「一回出陣前に全精霊様にも会つておきたいのですが。

大丈夫ですか?」

「それなら今宵にでもラグドリアン湖に来て貰いたい。あそこなら機密も守れるので。」

「分りました。今宵、ラグドリアン湖に出立します。
同行人にワルドとマチルダを連れて行きます。」

「お待ちしています。父上。」

そう言つと彼女はシユウと音と共に消えた。
恐らくラグドリアン湖に帰つたのだろう。

「姫様、今伺つた通りです。今宵、ラグドリアン湖に出かけ、全精
靈様と会談。
その後アルビオンに出かけ、レコンキスタを殲滅して参ります。
同行にはワルド子爵、マチルダを連れて参ります。」

「分りました。ではトリスティン王国王女として正式に異国のメイ
ジ。

タロウ・ヤマダ殿にレコンキスタの殲滅を依頼します。
殲滅後の褒章は、帰国後と言つ事で宜しいですね？」

「モチロンです。ですが、この辺り一帯の土地は頂いても宜しいで
すよね。

孤児院を建築して出かけたいのですよ。」

「結構です。」自由にお使いください。

詳細はマザリーが書類を書いておきますので。」

ミッシャ。

コレでこの土地はオラ達のモノ。

出かける前に孤児院作つておいて、テファ達を連れて帰るどお。

「うしてタロウ達はレモン殲滅の旅にまた出かける事になります」と、

お姫様來訪 2（後書き）

キユルケも思い出してしまいました。
タロウの妻 ズはどうなるのでしょうか。
次回は精靈との集い& a m p;・アルビオンへの旅立ちです。

熱闘 ラケヤコトハ湖（繪書モ）

ラグドリアン湖に精霊が集います。

熱闘 ラグドリアン湖

タロウです。

あれから姫様はルイズと遊んで帰られるとの事で学院に行かれました。

チョッ、姫様。その本はまだ持つて逝かないでください。

後で届けますから。

ルイズに見つかると騒ぎます。

お願ひしますって・・・

はあ・・・。

オラはマチルダと一緒に自宅横に大きな孤児院と店舗を建築。
こんだけあればテファと孤児を養う施設としては充分でしょう。
旅費と支度金もマザリーーーから貰いましたし・・・。

自宅の留守をシエスターとタバサ。

そして何故かキュルケも留守番をするとか言つので、頼んでおきました。

くれぐれもアルビオンには来るなと釘を刺しておきます。

彼女達は放置してると、付いて来ますからね。
危険ですので、止めて貰いました。

さて、ワルドさん、マチルダさんを引き連れ、オラは馬に颯爽と・・・。

乗れません。

やはり前世の事は前世の事なんですね。

完璧に乗馬が出来なくなつてました。

マチルダの馬の後ろにしがみ付く事にしたのです。シクシク・・・。

彼女も前世同様と嬉しそうです。

ワルドは、今回は盾になりますと気合充分。いや、居てくれるだけで助かるのですが。

トリステイン王国の紹介状も頂きましたし、これで安心して旅立てるます。

さて・・。

馬を走らせる事、しばらく・・。

夜半にようやくラグドリアン湖に到着しました。尻が痛くて割れてしまいましたが。

さて・・。

ノンビリとはしてゐヒマなあつません。
精靈様を待たせているの・・・。

() () () お待ちしておつました。お父様 () () ()

(@) (@) - ?

田を疑いましたよ。

だつて、精靈様がすべて土下座して待つてたのですから。
ビルなつて言つてもムリっス。

オラはヘタレですからね。

ワルドもマチルダもビックラして腰を抜かします。
ムリもありませんよ。

この世界最高の精靈様がすべて揃つて居るだけでもビックラなのに、
土下座して待つてゐるのですから。

「精靈様、どうしたのですか？
自分如きに土下座などして・・・」

（（（（我等の父となるべき人を立つて待てるモノですか。
我等の父となるタロウ様。））））

シクシク。

もう確定なんスか？

この異界の神になるつづーのは・・・。

まあなれと言うならなりますが、せめて人としての寿命を生きた後に
にして欲しいです。

人間としての寿命が終わるまでは、気ままに人間させて欲しいっす
よ。

そいからオラは精靈様と色々と話し合いをしました。
ルイズの虚無はゼロ様が排除し、前世同様に風のドットにする。
コレであの子も幸せになるでしょ。

その辺りはオラがアルビオンから帰国後にする事に決定。
んで、自宅の地下にすべての精靈様が引越しとの事。。。
ちとヤバイのでは？

特にフレイム様は火の精靈。

火事になりますよ。

そしたら、彼女・・・。（精靈様はすべて女性形体ですた。）

火事にはならぬ様にするから置いてくれ・・・と泣いて頼むのです。
さすがに女性に泣かれるのはヤなので、んじゃ絶対に火事にはしないでネ！と、

念押しして来て頂く事にしますた。

今回のアルビオン遠征にはすべての精靈様の分身がオラに着いて来て
てくれるって事です。

スゲ・・・・。

腰を抜かしてたワルドとマチルダはアクア様のダイブで復活。
ラ・ローシュルに向けて出発・・・。

明日でいいや。

今宵はココで野宿です。
もう気分が疲れました。

その夜、ワルドとオラは湖畔でキャンプ。
マチルダは鍊金で作った小屋に寝て貰いました。
明日はノンビリと過ごすと

熱闘 ラグドロマン潮（後書き）

テレビ見てました。
格付けチェックのGACKTさんは凄いわ。

・・・・・（前書き）

筆者も驚く程の上の事態となつました。

・・・・・

翌朝・・・。

オラ達は更に驚愕の斜め上の事態となつてたのです。

「タ・タロウ様・・・。
アレつてまさか・・・。」

「ワルド、オラも腰を抜かしただ・・・。」

「タロウ様、しつかりしてください。男でしょ?」

「いや、男でも腰を抜かしますよ。コレには・・・。」

そう・・・。

湖上には、伝説の戦艦ムサシが浮かんでたのです。

「父上よ。お預かりしてたムサシは確かに返納しましたぞ。」

「父上よ。風石は数十年は大丈夫なレベルは搭載しておきましたぞ。」

「

「父上、砲弾の代わりに私の火石を整形して搭載しました。」

・・・・・。

彼女達の話を要約すると、預かつてたムサシを返還したぞ。
風石も火石も搭載したぞ。

何時でも戦つて濃いや。『るああああの体制だとか・・。

何せ地球上の歴史でも最大最強の戦艦が武蔵と大和。そのムサシが一千年の沈黙を経て、再びハルケギニアに帰つて來たのです。

しかしどうしよ。

三人しか居ないのですが・・。

「父上よ。偏在を使えば良いですぞ。」

おお、その手がありましたな。

ワルドとオラは作れるだけの偏在を作り、ムサシを動かす事にしました。

こう言う時は風使ひは便利ですね。

自分と同じ人格の偏在を作れるのですから。

ワルドの偏在には単純な部署に付いてもらい、重要区画はオラの偏在に任せます。

ん・・・。

コレで何とか出きるね。

あ、マチルダも乗せないと・・。

「タ・タロウ様、私如きが乗つても宜しいのですか?

この様な恐れ多い存在の船に。」

「帰りには孤児も乗せるからね。

広いから迷子も出ると思うよ。孤児の指導は任せると

「

「分りました。孤児は私に任せてください。

それにも浮かぶですか?この様な巨大な船が・・。

「

「大丈夫ですよ。前世でも飛ばしましたし、風石も満載してあります。

数十年は飛ばせられる量らしいですよ。」

「それはまた素晴らしい。。。では行きますか。」

「ウン。由の国、アルビオンへレッカラゴー！」

オラの掛け声と共にムサシは一千年の眠りから目覚め、大空へと舞い上がるのだった。

精霊様も乗つてるので、万一一の魔力切れもノープレブレムです

「ジーッ」と血の擬音と共に、幾多の年月の眠りから今。

戦艦ムサシは蘇るのだった。
いや、前世でも飛ばしたけど、このサイズが飛ぶなんてマンガでしかあり得ません。

速度は実際の武蔵が出し得た27ノットです。
これが平均速度となります。

考えて見たらこの世界でのムサシって浮かんでただけで戦闘はしないませんよね。

今回が初の実戦ですな

でも艦首の菊花紋章が消えて大穴が開いてるのですが。
精霊さま。。。

「父上よ、アレは父上の脳内にあつたアレを設置しただけですぞ。」

「アレッて・・・まさか・・・。」

「波動砲とか壱ツビ器です。」

〇一・二〇一一

精靈様、何と言つ事を。。。

悪乗りが過りますべ。

ンナの地上で発射出来る訳がないつしょ。

この星や双月が消し飛んでしまいます。

アレは絶対に封印ですな。。。

まあ波動砲は封印で弔シとして。。。

(菊花紋章でフタをしどきました。)

とつあえず砲塔のチェックです。

お、一度良じ目標があつます。

フラフラと揺んでるドリードン田掛け発射

頭怒おおおおんと壱ツビ音と共に砲弾が大気を切り裂きドリードン田

掛け

飛び去ります。

スゲーーーー。。。

甲板に誰も居ないから良かつたけど、居たら即死ですよ。
確實に。

ブチつ・・。

目標のドラゴンは消し飛んでしまったみたいです。

ありがとうございます。ドラゴン。

君の犠牲は絶対に・・・忘れます。

・・・そう言えば誰か乗つてた様な気がしますが・・。
ま、いいか

（後にあのドラゴンに乗つてたのがジュリオだつたと知るのだ。
さらば、ヴィンタールヴよ。）

ムサシは悠々と空を飛び、昼前にはアルビオン大陸に到着う。う。
さて、アホ王と面会すつか・・。

え？？何故アルビオンの王がアホかつて？？
そりやこんな事態になるまで、国を放置してたからよ。
有能ならンナ事にはなりません。

この世界のウエールズはナンパ男かな・・。
アンリエッタが毛嫌いするなんて相当だぞ。

まずは迂回して、王都ロンティウム後方からハヴィランド城に着陸
しますか。

あ、ムサシの装甲ならこの世界の砲弾がいくら命中しても蚊に刺さ
れた程度っス。

ハヴィランド城は見知らぬ巨大戦艦の出没に大騒ぎとなつてた。

「アレはなんだ。ビーの船だ？」

「父上、艦尾にコステインの国旗が見えます。援軍ですか。」

そう、出撃時に国旗を掲げた方が樂じやね?とのマチルダの指摘で、

国旗を作り艦尾に掲げてたのだ。
マチルダさん、GJでした

主砲を旋回させ、敵軍の方へと向けておいて、オラ達はお城へと向いました。

あ、もちろん偏在は残しますよ。

オラ達はハヴィラン城へと歩き始めたのです。
あ、マチルダさんは留守して貰いました。
色々この国とは揉めた一家ですからね。

・・・・・（後書き）

ムサシ復活編でした。

前回では実戦に使う事の無かつたムサシがどうするか。

次回をお待ちください。

波動砲は封印ですよ。

作ったけど危険過ぎです。

会談（前書き）

いよいよウエールズとジョームズとの会談が始まります。
いきなり戦闘なんてムチャはしませんよ。

会談

タロウです。

マチルダをムサシに置いて、オラとワルドの本体はハヴィランド城に入りました。

戦艦にビビったのか、援軍と気づいたのかは分りませんが、敵対行動は取つてませんね。

もつとも敵対したら潰しますけど。

今のオラにはこの城には知り合いも同僚も家族も居ません。見知らぬ国人ですからね。

一応アンリエッタから援軍だぞ!との伝手を書いた手紙を預かつていますから、

ズドンとかされる事は無いと思います。

念のため、身体周りをバリアモードキで囲つて警戒してますよ。信頼出るのはワルドと自分、マチルダだけです。ハイ。

「アルビオン王国、ジョーモズ一世はいらっしゃいますか?」

「余がジョーモズだが・・・。」

「始めてまして。トリスティン王国で魔法学院教師を務めてるタロウ・ヤマダと言います。

隣はトリスティン魔法衛視隊隊長、ワルド子爵です。」

別にいいよな。ワルドは事実衛視隊に居たのだし・・・。

「あの巨大な船は・・・。」

そしたらさ・・・。

いきなり彼女達が出現です。

いやオラが説明するよりは信頼してくれるからいいのですが・・・。

（黙れ。無能な単なるモノよ。

我の父となるタロウ・ヤマダ殿に不遜な態度など千年早いわ。
控えよ。

我は水の精靈なり。）

（我は火の精靈なり。）（我は風の精靈なり。）

（我は土の精靈なり。）（我は虚無の精靈なり。）

もう王様達は真っ青ですよ。

彼女達こそがこの世界の基盤となる精靈様なのですから。
いかに王と言えどもタダの人間。
彼女達に逆らえるハズもありません。
しかし大事になつて來たな・・・。

「アハハハハ・・・。

まあ精靈様の事は置いてください。

自分はこの戦いに勝利するための援軍としてこの地に來ました。
あの戦艦ですが、かつてのハルケギニアに君臨してた伝説の巨艦で
す。

聞いた事はあるでしょ？」

「確かに滅びる前の大陸に巨大な戦艦が遊弋してたとの文献はあります
したが。

アレがそつなのでですか？」

「その通りです。今もレコンキスタの攻撃を跳ね返していますが、

「おお、アレが伝説で云々られてた巨艦ムサシですか。」

素晴らしい巨体です。

でもどうしてタロウ殿がアレで来られた・・・。

申し訳ありません。精靈様。

タロウ様はあの巨艦の主なのですね・・・。」

（そうだ。単なるモノよ。我が父となるタロウに対し不遜な態度は取るなよ。）

我等と敵対するのと同じ事になる。

我等を敵に回すと言つ事は、お前等の最後と同じだ。）

「滅相もございません。精靈様。

私達人間に取つては精靈様のご加護あればこそ生きていられるのです。」

（分れば良い。単なるモノよ。）

父上よ。ヤツ等にキチンと指導をしてほしい・・・。）

何か力オスとなりましたが、彼等も壊滅寸前の「国」の民。後もありませんので、援軍は大歓迎だそうです。

一応、敵の魔法は精靈様がすべて無効としてますので、鉄砲とかヤリ、刀程度しか攻撃方法は残されていません。

あまり国土を破壊するのもアレなので三式弾で敵兵を焼き払つてあぽんして貰いますか。

向こうの戦艦つづいても木造の船ですからね。チヤツチヤツと破壊して降参して貰いましょう。

あ、その前に・・・。

「ウエールズさんと並んで王子はいらっしゃいますか？」

「わ、私ですが。タロウ様・・・」

精霊様の権威つてスゲーね。

オラに完璧にビビッていらっしゃいます。

ま、話は進めておきましょう。

「トリステイン王女のアンリエッタ殿からの伝言です。

「大嫌いだから手紙とか寄越すな。」だそうです。

どしたのですか？彼女に口まで嫌われるなんて・・・」

ウエールズさん、相当の打撃を受けたのか真っ白になっています。
当然でしょうね。

「ウエールズさん、女性はアンリエッタばかりではありませんよ。
いくらでも居ます。世界の人間の半分は女性なのですよ。
元気を出してください。」

「ハ・ハ・は・は・・・。ありがとうございます。
タロウ様・・・しばらく一人にして貰えませんか？」

「うーん。そうしたいのは山々なのですが、今からドンパチが始ま
るのですわ。

そんな悠長な事は許しません。

拠つてアンタも戦艦に乗り、弾込めとか手伝つて頂きます。
ブツチャケ人手が足りないのでですよ。」

ウエールズは分りましたと言い、ムサシに乗り込む事を承諾してくれた。

ジエームズは邪魔なので玉座に座つていふと言ひ渡し、精靈様も残つて貰う事にしました。

魔法を無効にしたのなら、精靈様に手伝つて頂く事もありませんしね。城の兵士も使えそつなのをピックアップして、弾込めの手伝いに駆り出します。
さて、コレで準備万端かな？

会談（後書き）

次回はレコンキスタの嘆きです。

レモンキスターの最後（前書きを）

レモンの親玉の謹きです。

レコンキスタの最後

余の名はオリヴァー・クロムウエル。

帝政アルビオン皇国の中なるべく、旧制アルビオン王国を攻撃している、
レコンキスタの総帥でもある。

既に大半のアルビオン攻略を済ませ、残りはハヴィランド城を攻め落とすのみ。

明日には余がアルビオン皇国の中なるハズだった。
が・・・。

何だ？？

あの巨大な船は・・・。

突然ハヴィランド城の後方から出現したと思つたら、城の前に鎮座・。

城よりも大きいかも知れぬ

あの様な巨大な船が居座つては、城を攻撃できぬでは無いか。

我がレコンキスタの精銳部隊がアノ巨艦に攻撃を仕掛けているのだが、

すべて跳ね返されてしまつ。
どうも巨大な鉄の塊らしい。

それならと、ゴーレムを成型し攻撃しようとしたら、余を含め、すべてのメイジが

魔法を放てなくなつてたのだ。

余の虚無（アンドバリの指輪の）魔法で繋ぎとめてた兵士や亡靈兵もすべて、

余の制御を離れ、亡靈兵士は軀に帰つてしまつてた。
どうしてこうなつたのだ??

幸いにも敵は砲撃もナニもしない。

それならあの船によじ登つて船を奪つてしまえば良いでは無いか。
余は兵士に命じ、船に登つて奪つ様に命じた。
だが船の舷側は凄い高さで、すべてが鉄のためひっかける事も適わ
ず。

兵士は諦めて逃げ帰つて来た。

この無能めが・・・。

だが虚無が消えた今となつては無能兵士と言えども、処分も出来ぬ。
もう少しだ。

あの船さえ無かつたら、余がこの国的新しい王となれるのだが。

クロムウエルは嘆いていたが、そもそもすべての精靈がタロウを支
持した時点で、
彼等の負けは確定してる。

後はどう言つ敗北を喫するか?
だけなのだ。

タロウはムサシの艦橋で敵の攻撃を眺めてた。

もちろん反撃はするが、その前にどう処理するかを考えてたのだ。
既にアンドバリモドキの魔法効果は失せてしまつたらしく、洗脳さ
れてた貴族、

兵士は「チラ側に逃げて来て投降して来た。

ジョームズの配下の兵士が臨検してゐる頃だらう。
さて、そろそろ反撃するか・・・。

タロウの指令で、ムサシのエンジンはフル作動を開始。轟音と共にムサシは巨体をアルビオンの空に浮かべ、ゆつたりとした動作で主砲をすべてクロムウェル達に向けて照準。

砲撃を開始した。

狩りの時間の始まりだった。

「ウワーー、浮き上がつてコッチに近づいて来たぞ。逃げろおお。

「兵士よ、ナーチしてるので逃げるな。

戦え。戦艦よ、体当たりしてでもあの巨艦を葬れ。」

クロムウェルは叱咤してゐるが、戦艦の乗員はすべてクロムウェルの魔法から解放され、

白旗を上げてアルビオン側に投降してたのだ。

残されたのは純粹なレコンキスタ兵士のみ。。。

彼等は巨大な砲身が「チラを向いているのを目撃した。

そして火を噴くのを。

彼等の意識は次の瞬間、すべて消し飛んでしまったのだ。

「タロウ様、凄まじい破壊力ですね。
コレがこの艦の力ですか？」

「ン、コレでも手抜きなんだが。

本気出したらハルケギニア大陸 자체が消えてしまつ。
前世ではトリステインに貸与したけど、もう危なくて貸し出せませ
ん。」

ワルドはコレで手抜きと聞き、危うく腰を再度抜かす所だったのだ。自分はとてもない力を持つ人の配下なのだと、初めて気づいた。

レコンキスタの勢力が布陣してた地域はすべてムサシの砲撃で廃墟となつてた。

攻撃を目撃してた元レコンキスタの兵士は、投降出来て良かつたと感涙してたのだ。

砲撃に使つた弾丸はすべて三式弾。

それも火石で出来た強烈な弾丸だから、被害を受けた彼等は遺体も残さず。

灰燼となつてしまつたのだ。

「ヨシ、最後に鉄鋼弾を十数発砲撃。砲撃後は敵の生き残りが居るか臨検する。

最後まで手抜きするなよ。」

タロウは偏在を通じてすべての兵士等に命令を下す。

鉄鋼弾を打ち込まれた地域は巨大なクレーターとなつてしまつた。

生物の息吹も感じられない死の地区となつた元レコンキスタ布陣跡地は、後の時代にデスランドと呼ばれる地域となるのだ。

ウエールズを含めアルビオン側は絶対劣勢の状態から勝利出来た現状が信じられず呆けていた。

だが、事実レコンキスタの兵力は壊滅し、裏切つてた兵士も魔法で操られてただけと分ると、段々勝利の実感が沸いて来たのだ。

遙か上空でそれを目撃してたヤンデレ姉さんのショフィールドは危うく失禁するところだった。

「何てこつたい。

あんな巨大な軍艦に襲われたら私のヨルムンガンドでも破壊されてしまうじゃない。

こりや一度ジヨセフ様に相談しておかないとね。

クロムウェルはもうダメだろ？・・。

ショフィールドは踵を返すと、ガリアに向けて逃げて行った。

タロウはショフィールドらしき人が乗ったドラゴンが消え去るのを感じていたが、

下手に消すと前世同様の事態もありえると無視する事にしたのだから。もう戦いは終わったのだから。

「タロウ様、敵の兵士はすべて壊滅。

クロムウェルと思しき僧侶の亡骸の欠片がありました。」

「・・・そうか・・。では埋葬はすべてお前等に任せると・・。

「モチロンです。私達がすべき仕事ですから。」

「じゃ勝利の雄叫びと行きましょうか

「「「「「ハイエイオ————」「————」」」

ムサシの広い甲板に勝利の雄叫びが上がったのだ。
ジェームズはムサシのあまりにも凄い破壊力にクロムウェルが不憫に思い始めてた。

アレでは塵でも残つてたら奇跡だ・・と。

その夜、ハウイランド城は深夜まで勝利のパーティが続けられたとか・・。

レコンキスタの最後（後書き）

レコンキスタ壊滅の編でした。

あまりにも簡単なので逆に困りました。

ムサシはもうリストラインには貸すしません。

危険過ぎです。

波動砲は封印です。

丘の国アルゼン(繪畫)

ジンホヤノ繪畫の題目です。

血の国アルビオン

タロウです。

ただ今戦勝会の真っ只中。

既にワインはビンで数本は飲みました。
グルグルが目を回してまーーす

（間違つてでも波動砲を双月に向けて発射なんて・・・しませー
ん）

「タロウ様、本当に今回の助成は助かりました。
おかげでアルビオン王国は救われました。」

「放置してたら次はトリステインでしたからね。

オラも店作る予定なのに、戦争が飛び火するのはマッパラですよ。」

「そうですね。ヤツラはアルビオンを征服したら、次はトリステイ
ンだったのは、
押収した敵の書類からも明らかです。」

「どうして坊主で満足してなかつたのかね。
あ、ついでに言つておきますが、クロムウェルは虚無ではありませ
ん。」

「ハ??」

(ヤツは我の持つアンドバリの指輪を奪い、死人を操り、他人の意思を操つてただけだ。

単なるモノの言い方を借りれば、詐欺師と言つモノよ。)

「そうだったのですか・・・。どうりで彼等の証言が曖昧だったハズです。」

投降した兵士や貴族の取調べをした所、何故レコンキスタの配下になつてたか、本人も理解できていないと証言が圧倒的だったのだ。当然だわね。

「タロウ様はコレからどうされるのでしょうか。
この国の土地が入用ならいくらでも割譲致します。
もし王が望みなら、私が退任しタロウ様に・・・」

「要りません。國なんて邪魔です。
オラはトリステインで店を持つのが望みなだけです。」

「どの様なお店でしょうか?」

「それは・・・ヒ・ミ・ツ・です」

「そ、そうですか・・・。では開業される日にはお声をかけて下さい。國をあげて歓迎の式典を致します。タロウ様は我が國の英雄ですから。」

いや、英雄とか別にどうでも良いのですがね。
でも何か対策しておかないと、またロマリアのシコが絡んでウザイのよ。

前世ではケンカしてしまいましたしね。

そうだ

「 でしたら今回の首謀者、クロムウエルはロマリアの傀儡でアルビオンを攻撃してたと、
デマを流してください。
どうせヤツは消えた人間。
いくらでも罪を被せてもOKだと思いますよ。」

「 それは構いませんが、ロマリアが怒るのでは?」

「 ヤツ等の増長が坊主マンセーに繋がってるのですよ。
オラが作る店にもヤツらは絶対に絡んできます。
ですので、坊主の力は絶滅させるべきです。
ブリミルは精霊様も嫌っていますしね。」

(そうだぞ。

単なる無能モノよ。

我等精霊はブリミルには迷惑を蒙つておる。

ヤツ等を潰す加勢に加わるなら汝等の長年の懸念もすぐに解決して
やるわ。)

「 単なる無能モノですか・・・。ハア・・・。

精霊様、長年の懸念とは・・・。」

(浮遊大陸を地に戻してやるのだ。)

「 誠ですか。精霊様。

私達アルビオンの民はこの地が大地に戻る日を夢見ていました。

それが適うなら、どの様なお手伝いでも致します。」

（分った。この大陸はトリステイン沖合に着水せぬ。

良いな。）

「ハハーッ。宜しくお願ひします。」

アハハハ。

アルビオンが降りるつてよ。

まあ空をフワフワと浮いてるのは海にテンと落ち着いてる方がヨロシイですね。

精霊様はウソは絶対に言いませんので、現実となるのでしう。でもこの地下に眠る大量の風石は・・・。

そこに脳内に響く精霊様の声。

（父上よ、風石はすべて前世の如く父上の土地に付いて参ります。暴走は抑えてありますので、大陸が浮き上がる心配も無用かと・・・。）

あははは・・ハ・・。

精霊様、またですか・・。

まあヨロシイですけど。

どうもオラが住み着く土地にすべて移動をせむつらじこです。大陸浮遊の元凶となる風石を。

アルビオンを永劫に浮かばせるだけの風石ってどんだけの量が埋蔵

されてるのでしょ。

それをすべてとは・・。

何か使い道無いかね。

ま、そんな事は後よ。

早くテファを迎えに行つて孤児院に孤児を連れて行こつ。

もつゝの土地には用はありまへん。

オラ達は翌日、アルビオン王家総出で見送られ、城を去る事になりました。

行こつ
ヴァスティンガオリューション
双山を迎えて

マチルダさん、目が怖いんですが・・。

血の国アルビオン（後書き）

アルビオンが着水する事になりました。
もつとも今すぐではありません。
予定ではタロウがどこかの土地を貰った頃です。
次回はテファとの遭遇です。

双山との遭遇（前書き）

ティファニアとの遭遇です。

双山との遭遇

タロウです。

ムサシに乗り一千年ぶりにテファと会う事になりました。
いや、こんだけ大きい船での旅つてホンマに素敵ですね

艦首の波動砲だけは不気味ですが。

どこから使え、使えて誘惑の声が聞こえるので、
菊花紋章のフタを取りたくなります。

ですが、我慢ですぞ。

人として終わるかも知れません。

コレをブツ放したら。

さてウエストウッドまではアッと言つ間に到着しました。
ですが、コレを降ろす訳には行きません。

フライで降りるつきや無いですな。シクシク・。
幸いにもワルドも風のメイジ。

マチルダさんも土とは言えトライアングルのメイジです。

フライ程度は楽にこなしてくれます。

子供達やテファは手分けして乗せる事にしましょ。

ムサシの機動は偏在ズにお任せして、オレ達はフライでテファの居
る森の中の

小さな家に着陸です

「テファ、テファ、居る?

マチルダだよ。テファ・。。」

マチルダが家中の中に声をかけると、「ハーハー」と可愛らしき声が聞こえる。

一千年ぶりの元妻、テファとの再会であります。

「あ、お姉さん。本当に久しぶり。

それに・・後ろの・・・・あ・・・・貴方様は・・・・。」

テファはそう言つて黙つてくつてしまふ。テイツシユテイツシユをしてしまつた。

そして・・。

「お、お兄様あああ。また会えたのですね。」

そう言つとオラに抱き付いて來たのです。

ウワ・・む、胸があああ。

いくらドードーは卒業したつづーても、この破壊力には鼻の奥がツーンとして来ます。

ヤバ・・・。テイツシユテイツシユ・・。

オラが鼻血を出し始めてフランチいたのを

マチルダとワルドが気づいてテファから引き剥がしてくれました。

ヤバかつたです。

知つてはいても、彼女の二つの胸の破壊力は凄まじいモノがあります。

フガフガ・・・。

鼻血も止まつたので、家に入れて貰い、マチルダからオラ達の事を紹介して貰います。

そして・・。

「お兄様は前世と変わりませんね」

やはり彼女も思い出したみたいですね。

「テフア、キミも思い出したのか？」

「ハイ。一千年も放置なんてあんまりです。
でも再会出来たから許してあげます。」

「この世界でも孤兎院を作ったから、引越しするからね。
アノ船で・・・。」

「アレって・・・まさかムサシ?」

「ひんぽ ん」

記憶が戻つてると説明も楽ですね。
大半の人は、アレを見たらパニックになりますから。
しばらくすると、孤兎のガキンチヨ共が森の広場から帰つて来て、
空の上のムサシを見て大騒ぎしてた。

「スゲーー。あんなデカイ船がウチの上に止まつてる。」

等々・・・。

「皆……あの船でトリステインに引越しですよ。」

「ホントー?
ヤッター、スゲー。最高」

「あんな大きい船に乗つても怒られないの?」

「デッカイ大砲が付いてるね。」

などと子供達は大騒ぎである。

テファからオラの説明があり、今からトリステインの新しい家に引つ越す。

新しい家では学校と仕事もあるけど、自由に遊ぶ事が出来る。
などと説明してあげた。

この世界の子供は現世の子供よりは大人なので、仕事をするのは当然と考えてる。

子供＝すべてが自由と考えていないのだ。
ましてや戦乱の中で親も無くした子供達。

自力で生きる術を考えないで済むだけでも幸せと考えてるらしい。
現世の子供はホンマに恵まれてますね。

少し苛められただけで自殺するなんてこの世界の子供から見たら信じられませんよ。

もし苛められたら、親と学校に訴えて、それでも解決出来ないなら
引き籠もつたり、
転校すれば良いのです。

脱線しましたが、引越しについては依存が無いそうです。
荷物は・・・。

面倒ですので家ごと船に転移させてしまいましょう
どうせ巨大な船です。

この家程度なら、蚊を乗せた程度しか負担になりません。
その前に・・・。

「テファ、少しいいかな？」

「何でしょう。お兄様・・・。」

前世同様に彼女のエルフ耳の整形について説明します。

「キリの耳だけだ、前世同様に普通の耳にしてみたいのだけだ。」

「モチロンお願ひしますわ。この耳では外も歩けませんから。」

「んじゃオラが整形するから、しばらく耳を閉じて……。」

「分りました。お願ひします。」

目を閉じてくれたので、オラは彼女の耳を一番形の良い女性の耳をイメージして、整形クリニック始めた……。

そして数分した頃……。

「テフア、終わったよ。」

オラは簡易に作った手鏡を彼女に渡し、自分の耳を確認させたのです。

「わ、綺麗な耳 お兄様、ありがとうございます」

そう言つと彼女はハグして來たのです。
わ・・胸が、胸がああああ。

今回は周囲に誰も居なかつたので、引き剥がしてくれる人も無く。オラの頭はショート、意識はブラックアウトして氣絶してしまいました。

フンガー。

やはりテファの胸の破壊力はハンパではありません。
絵だけでも相当の威力ありますが、リアルで耐えられる勇者は皆無
でしょ。

その夜はムサシを空に放置して、森の家にお泊りとなりました。

双山との遭遇（後書き）

テフアの胸は凶器ですねええ。

『元寇』（福井利）

今日本が元寇の口でや。

お引越し

タロウです。

氣絶したオラはワルドやマチルダ達に拠り、家に担ぎこまれ、その夜はお泊りとなりました。孤児のベッドを占領して申し訳ないっス。

翌日、お詫びにクリエイト魔法でダーリンの朝食セットをクリエイトし、

全員に振る舞いました。

皆様大喜びですね。

さて、いよいよ引越しです。

空の上の純白の戦艦ムサシ。（比島海戦時に白く塗られたママです。）

アレに家ごと引越しします。

無駄に広い甲板に転移してしまいましょう。

彼等の荷物もすべて一緒に転移し、トリステインの孤児院の施設にしてしまいます。

家ごと引越し出ると聞いた彼等は大喜びです。

新しい宿舎にも魅力はありますが、住み慣れた家もあるのが一番ですからね。

ウンウン。

さて、チャッチャッと片付けてしまいましょう。

空の上の偏在も待ちくたびれてると思います。

「全員、この場に居るね?」ないと放置されるぞ。

ひーふーみーょー・・・・・ン、ガキンチョは全員揃つてまんな。

んじゃ、ムサシに転移開始。」

そう宣言すると、家はふわーーっと浮かび上がりムサシに向けて浮上。

やがてムサシの後部甲板に到着。

こつ言づ時は広い戦艦に感謝ですな

「スグーー、広い、広すぎ」

「オイ、ガキンチョ。ココは空の上だからな。

落ちたら死ぬぞ。」

「分つてゐよーだ。でもココなら大丈夫だろ?・タロウ様。」

「ウンウン・・・マチルダ、彼等の面倒は任せるよ。」

「お任せください。タロウ様。」

「ワルド、んじゃムサシを出発させよーか?」

「御意です。タロウ様。」

危ないとは言いましたが、チツは風の精霊が周辺をバリアみたいに
囲み、

万一の落下にも対応出来ています。

そして火の精霊が適度な気温に周辺を暖めてますので、高い空でも
寒くなりません。

この戦艦の運航には既に精霊様が欠かせなくなつてゐます。

水の精霊様はすべての人の健康状態をベストにしてますしね。

後に孤児や関係者は寿命が尽きる日まで病気もケガも無く健康に過

「ごせたのは、
すべてアクアさんのおかげです。

さて・・・あまりの巨大な船に呆然としてるテファアの手を引っ張り、
オラ達はムサシの艦橋に登る事にしました。

「テファア、ココがムサシの指令塔だぞ。スゲー高いトコだろ。」

「タロウ様、凄いですね。前世では見かけただけで乗った事はあり
ませんので。」

「ん・・・悪かったね。前世は乗せてあげられなくて。
でも今回はマチルダを含め、テファアが一番だヨ」

「ありがとうございます。お兄様。
そつ言えばシエスタお姉さまは?」

「彼女ならトリステインの家で留守番だよ。今回は戦闘があつたの
で、さすがに連れて来る事は出来なかつたの・・・。」

「そうですか・・・そつ言えばアルビオンの戦争って・・・。」

「このムサシで片付けてしもた・・・。

あまりにも簡単に終わりすぎて、敵に申し訳なく思いますた・・・。

「お兄様が戦われたのですか?」

「ン・・。て言つが、ムサシだけで終わつてもーたのよ。」

「凄いです。お兄様はやはり英雄なのです。」

「ま、英雄にすんのはムサシにしてね。

オラは前世同様のラタシヨップが大切だから。」

「あ、またあの可愛らしいお店を作るのですね。
私も頑張ります。」

「頼みますね。ぶっちゃけ人手はいくらでも要りますので。
働いて孤児院と生活向上に向けて頑張つてチヨ。
ついでにテファも魔法学院に入つて貰うヨン」

「あ・・。お友達をまた作れるのですね。
嬉しいです。お兄様。」

「ん、頑張つて友達百人作つてね。」

テファとバカを言いながらムサシはトリステインに向けて進む。
やがて昼過ぎにはトリステインの首都、トリスターニアに到着う。しゃーね。

ヤベ、では大騒ぎになつてしもた・・。
城からはマザリー＝やアンリエッタも飛び出して来てゐる。
しゃーね。
説明してオコ・・・。

オラはワルドを引きつれ、子供達やマチルダは残しフライで城に降

りる。

「タロウ様、凱旋おめでとうござります。
無事、偉業を成し遂げられたのですね。」

「タロウ様、おめでとうございます。
そしてありがとうございました。
おかげで我が国は安泰となります。
それにしてもムサシ・・ですよ?
あの船は・・。」

「アンリエッタ王女様、マザリー二枢機卿様。
すいませんが機密もありますので、
城の会議室に移動出来ませんか。
さすがに口々で報告は・・。」

「おお、あまりの驚きに飛び出してしまいました。
お許しを。衛兵。
勇者タロウ・ヤマダ様と御付の護衛、ワルド子爵を丁重に城に案内
せよ。」

枢機卿の命令に城の衛兵は直ちにオラ達を城に案内してくれたので
す。

ワルドさんのかつての部下らしいですが、彼等はオッカナビッククラで
我々一人を城に案内してくれます。
しかし相変わらず臭い街ですね。
トリスターは・・。
後で掃除関係の話とかして見ますか・・。

「アンリエッタ王女様、マザリー二枢機卿様、ただ今帰還しました。」

アルビオンを侵略してたレコンキスタは総帥のクロムウエルを含め、全員殲滅して参りました。
あのムサシですが、ラグドリアン湖に眠つてただけらしかったのです。

そしてせつかくだから使おうと言つ事で、戦場に用いましたが…。
戦艦の砲撃のみで全て終わつてしましました。

敵に申し訳ないと思つ程、安易でした。」

「や、そうでしたか…。

それにも前世では、

浮かんてるだけでも脅威だつたムサシの戦闘力がそこまどとは…。

」

「アレは持ち出した時点で勝利を決してしまいます。
ぶつちやけ、この世界の戦争に用いるのは反則ですよ。

前世ではトリステイン海空軍に貸しましたが、今生では危険で貸
せません。

オラが管理しますので、國の方の説得はヨロシク」

「そうでしたか。では國の重鎮は私共が抑えておきます。
タロウ様がムサシは管理なさると言つ事ですね。」

「ハイ。普段は孤児院近くに池を作り、そこに浮かべて管理します。
万ーの際は持ち出しますが、大抵の事は自分達の戦力で何とかして
ください。

小競り合い程度では関与致しません。」

「いもつともです。

タロウ様には万ーの事態にならない限り戦争に関わらせません。

今回の勝利だけでも我が国古来からの英雄、万人にも値する出来事

です。

さて、勝利に対する褒章ですが・・・。」

「あの辺り一帯の土地の権利だけで結構です。」

「その程度では私達は他国からバカにされてしまします。アルビオンの英雄に報いる事も出来ないのか?と・・・。」

そこまで言わると、反論も出来なくなる。

アルビオンは戦争直後だつただけに言い訳も出来るが、トリスティンではそもそも行かぬ。

くけけけけ・・・。

困りました・・・。

・・・。そうだ

「んじゃ前世でのオラの領地だつた、ド・オルニエールつて土地はありますか?」

「ありますぞ。タロウ様。ですが領主亡き後は寂れた田舎ですが。」

「構いません。どうせ精霊様と同居したら化けますから。では、ド・オルニエール領主にして下さい。」

しばらくは学院近くの土地だけで構いませんから、地盤が固まつた頃、

任命して頂くと助かります。」

「分りました。」

では、後日ド・オルニエールをタロウ様に授けると共に爵位を國から出します。

「これでも足りない位なのですが・・・。」

「要りません。あまり重要な地位は重荷にしかなりません。
それにお金は自力で稼ぐ予定です。

当座は学院近くの土地だけで結構です。」

「分りました。ではその様に・・・。」

「タロウ様、本当に色々とありがとうございました。
私では何の力も与えられませんが、せめてコレだけは受け取ってください」

そう言つと、アンリエッタはオラにハグしてブチューとかましてくれたのです。

あまりの早業に反らす事も出来ず、ぶちゅーと呑みこました。
ヨイ、何故お礼のキス程度で舌まで入れるの？

「はあはあ・・・結構なお手前で・・・
もし足りない時は何時でも私の寝室に来てください。
私は何時でもパツチコイです」

「ほほほほ、姫様もお戯れが・・・。」

ほげえええ・・・。

やられてしました。

呆けた頭でオラは城を辞すると、フラフラとワルドを連れて街をブラ着いてました。

脳みそバーン状態のアホタロウです

お品越し（後書き）

次回は相棒との出会いです。
やはりタロウもテルフが必要ですからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151z/>

キモ男 カンバ～～ツク

2012年1月4日13時42分発行